
偽・竹取物語

白山菊理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偽・竹取物語

【ZPDF】

Z7938D

【作者名】

白山菊理

【あらすじ】

日本最古の物語「竹取物語」をベースにしたギャグ小説です。

かぐや姫の誕生？

今となつては昔の事ですけど、ある所に竹取の翁といつものが居ました。翁とはお爺さんという意味で決して名前じゃありません。おはなぬきの造いみつけ。その名の通り讚岐うどんが大好きで、根っからのうどん派でした。

お爺さんは蕎麦派のお婆さんと奥へ喧嘩けんかをします。この田も蕎麦対うどんで喧嘩をして、家から飛び出してこつもの竹やぶに来ていました。

お爺さんの仕事は竹を取つて、様々な事に使つたり何か作つたりする」とでしたので、この竹やぶは材料収集場所なのです。もちろん、竹だけではなく竹の子を取つていたことも否定はしません。

お爺さんは婆さんとの喧嘩の憂を晴らしをしつつ竹を切つてこると、竹の中に根元が光る竹が一本ありました。

もしかして、黄金の竹？これはお金持ちになれるかーしめしめ……

⋮

と、何ともござりじこ考えとござりじこ顔で竹を切ると……

「痛いっ！痛いっ！……首、首落がるし。危機一髪一生まれてきてすぐに九死に一生だし……」

と竹の中から喚き声が聞こえきました。

不思議に思つて竹に近寄つてまじまじと見てみると、三才くらこの可愛らしこねび、どこか小憎たらしこ女の子が座つていました。お爺さんは言いました。

「うう…黄金じゅ無かつたよ。まあ、良い。私が毎朝毎晩見る竹の

中に入るので分かった。さつと私の子になるはずの人なんだ。さつと、そうだ。」

「はつ？ 訳わかんないし。何で？ 何でそういう結論になるの？」

「ああ、私の家へ！」

「話聞けよーー！」

こんなわけで、お爺さんは手に乗せて小さな女の子を家にテイクアウト…いえ、持ち帰りました。

そして、お爺さんへの嫌がらせに夕飯を蕎麦にしていの婆さんは、女の子を見せ、経緯を話し、育てる事にしました。

お婆さんは大層喜び、お爺さんにつづりを茹でてあげる事にしました。

不機嫌なお婆さんを上機嫌にしてしまつぱり、この女の子は可愛らしかったのです。

と、ここで女の子が

「私、中華そば派だから。ラーメンだから。」

やつぱり可愛いのは外見だけです。

かくすべ育つかぐや姫

さて、この女の子を見つけてからとこつものお爺さんは竹やぶで望みどおり黄金の入っている竹を見つけるようになりました。お爺さんは段々と裕福になり、お婆さんに「誰のおかげで飯が食えどるんじゃ。」「うじんにしへ、うじんに」と、うじんを強制的に作らせるようになれる立場になつ、見事甲斐性無しから抜け出すことに成功しました。

女の子はといひど、養育するうちに、すぐすくといつ可憐らしい言葉は似合わないほど凄まじい早さで成長し、3ヶ月で人並みの背丈になりました。さすが竹から生まれた竹の子です。

お爺さんとお婆さんは、このあまりに早すぎる成長をあまり気にも留めず、普通の子と同じ様に、髪結いの儀式や裳を着せたりして、帳台の中から一歩も出さずに、ヒッキーな感じに育て上げました。おかげで、生まれたときから少し我儘でしたが、ますます我儘になつていきました。

「あのわー、おやつにプリン食べたいんだナゾ。」

「これこれ、おやつはここに大福があるじゃん。」

「プリン、絶対にプリンー。」

「仕方ない、買つてきいやう。」

「100円で3つ入りとか嫌だからねー。」

と、こんな具合に。

それでも可愛い女の子のためですから、甘やかし続けました。
俗に言つ猫可愛がりです。

しかし、じぶんな性格ブスになりつつある彼女ですが、外見の美しさ
といつたら比類がないくらいで、家の中も彼女がいるだけで暗いと
ころがなく、光に満ちています。

美しいのは外見だけですが、それでもお爺さんもお婆さんも、苦しい
ことや辛いことがあっても、この子をみると慰められるのでした。
たまに、この子の性格にイラッとする」ともありましたが、外見に
よつて誤魔化されていました。

こつして、この間にも黄金の入つた竹を取り続け、お爺さん達は財
力の大きい、いわば大富豪になっていきました。

女の子はせらりに成長し、背丈が大きくなつたので、お爺さんとお婆
さんはじめようやく女の子に名前を付けることにしました。いく
らなんでも遅すぎです。

三室戸斎部の秋田といふじつかのおつさんを呼びつけて名前を付け
てくれるよう頼みました。

すると、秋田は

「竹から生まれたんやろ? 竹子とかじゃだめなん? あ、駄目ですか。
ほんなら、『なよたけのかぐや姫』つていうのはどうやうひへうと、
うん。あ、OKですか? じゃあ料金の方なんですけど……」

と、いたつて簡単に名前をつけました。

『なよたけ』とは『弱竹』と書いて、若い竹を意味する言葉です。
どうしても秋田は「竹」にこだわつていたようですが、以後ずっと
かぐや姫と呼ばれるので竹といふ字をつけても目立ちませんでした。

虚しいですね。

まあ無事に名前も付き、おめでたいといつことで3日間酒盛りをして楽しんだそうです。

詩歌や舞などを催し、男という男は誰構わず呼びつけ、まさに逆ハーレム状態のかぐや姫。

かぐや姫の美しさに男達は虜になつて、なんでも言ひことを聞くのでかぐや姫は益々付け上がりります。

将来がかなり不安です。

「ところで婆さんや。そんなに厚化粧してどうしたんじゃ？」

「だつて、女の人は一人しか居ないのにあの子ばかり目立つてゐるから私も若い頃にもだつてみよつと思つて。うふふつ（ウイーンク）」

「おえええええ！」

私が私の嫁になつて下さいー（一）

世間の男性達は、身分など関係なく、皆かぐや姫を手に入れたい、妻にしたいと思うようになりました。

中には噂に聞いただけなのに恋い慕い、思い悩むロマンチストな妄想壁さんも居るくらいです。

皆さん、かぐや姫の我儘ぶりを知らないので完璧に騙されています。もう男どもは我慢しきれなくなりましてね、夜な夜な出掛けではお爺さん宅に居るかぐや姫を一目見ようと、闇夜に穴を抉り、覗き込むほど夢中になっていきました。

この頃から女に求婚することを「よばひ」と言つたとか何とか役に立つ様な立たない様な無駄知識ですけども。

家の周りをぐるぐる回つて、人の気配が無いようなところも覗いて見たりもしますが、やっぱり何の成果も出せず。

はたまた、家の人たちに言付けようとしても

「またですか。いい加減にしないと警察呼びますよ?いいですか、貴方のやつてることはストーカー行為と大差ないですから!てかそのものです!」

と、言われて相手にされません。

それでも尚、家から離れようとしない貴公子たちは夜を明かしながら過ごすものも多く、その意気込みは引退間際に犯人宅を張り込む刑事のようでした。

この男達の中でも志が大したこと無い人たちは

「必要も無い出歩きは無駄だ無駄だ。随分お高くとまつてらつしゃるけど、さつと我儘姫に違ひない。」

と言つて、一度と来なくなりました。
ある意味大正解です。

しつこい貴公子たちの中で、特にしつこく言い寄つたのは色好みと評判の五人。

どうしても恋心が止まらずに夜中問わずやつてきました。

このしつこいストーカーたちの名は、石作の皇子、庫持の皇子、右大臣安部のみむらじ、大伴御行の大納言、中納言石上のまるたり、と何とも憶えづらい名の方たちでした。

しかし、皆、身分の高い者たちだったのです。
身分の高い割には暇人のようですが。

私が私の嫁になつて下わせー（一）

お爺さんは、この五人の足下を見、…いえ、熱心な求婚ぶりを見て、かぐや姫に

「仏のように大切な儂の子よ、仮にこの世に来た変化の人と云つても、これほど大きくなるまで養つた儂にそろそろ恩返しを……」

と言つました。

言つてることが唐突かつ、最低です。

これを聞いたかぐや姫は

「何かチヨームカツクんですけど。でも、まあ育ててくれたのは事実だし、何か聞いてやつてもいいかな。確かに、私人間とちょっと違つけど、じじい達のこと親同然だし。」

何がますます口が悪くなつています。

足投げ出しちやつたりなんかして態度も悪いです。

それでもまだまだ容姿に騙されてくるお爺さんは、態度と口の悪さなんて何のその。

汚い言葉も美化されて聞こえできます。

「恩返しを…じゃなくて、儂のことを親だと思つてくれてるなんて嬉しいのう。儂はもう四十歳を越えた。とつぐに定年してゐる歳だし、竹取るのもきついし。もつ疲れ果てていつ死ぬか分からぬくらいですじや。だから、早くどうかに嫁いで玉の輿になつて、もつと安定して安心できる生活をさせてくれんかのう。國からの年金もあてになんないし。」

かぐや姫は、その話を聞いてすぐ不機嫌そうです。
まあ無理も無いでしょ。

半分以上はお爺さんの私欲ですし、そのために嫁がされるなんてた
まつたもんじゃありません。
かぐや姫じゃなくとも怒ります。

「はあ？ それじじいの私欲じやん！ 私行かないし、何でそんなのに
付き合わなきゃいけないの？ マジムカツク！ ！」

もつともな意見です。

しかし、お爺さんも一歩も引きません

「かぐや姫よ、お前は変化の身だけど一応女だ。儂が生きてる間は
こうやって居られるかもしねえが、五人のあの貴公子たちの事も
考えて誰か一人と結婚しておあげなさい。そして儂に安定した生活
を送りさせてくれ、頼むから。」

「一応女って何さ！ 一応って！ ？ でもさ、じじいの言つてるあいつ
らつて結構金持ちなんでしょ？ それで金にもの言わせて浮気とかし
たら困るじやん？ いくらだ、貴公子だとか言つても、その辯証わか
んないしさ、どの程度の志でストーカー行為してるんだか分からな
いじやん。だからイヤ！」

「随分なことを言つものだ。いつして夜を明かしてまで来てくれて
るといつのに。それだけだって皆、志が深いことは一目瞭然じやろ
ーーの親不孝者めーー！」

お爺さんはいつも一言余計です。

そしてかぐや姫もお爺さんの口煩をと氣合に押されて遂に折れまし

た。

ただし条件付で。

「じゃあここですよ、嫁いでやりますよ。ああ、嫁いでやりますとも。でもー、ただ嫁ぐだけじゃつまんないしー、相手も決められなからーちゃんとしたテストしようと思つんだけどー。私が見たいと思つものを持ってきてくれたら、まあ嫁いでやつてもいいかなーつー。」

お爺さんはこれを見て、暫く考えましたが

まあ、どの貴公子も金持ちだし金で買えないものは無いだらつ。僕もやつらの財力の確認をするか

と、せりて悪巧みを重ね、かぐや姫に「よろしこ」と言いました。

私が私の嫁になつて下さいー（III）

はてさて、日が暮れる頃に五人のストーカー、もとい貴公子たちは集合しました。

ある人は笛を吹き、ある人は歌をうたい、ある人は扇を鳴らし、人の家の周りでどんちゃん騒ぎをしている結構迷惑な奴らです。あきらかに近所迷惑です。

近所の家のおばさんが心なしかこっちを睨んでいるように見えますが、貴公子たちはそんなのお構いなしで騒いでいます。そこへ、お爺さんが家から出てきて貴公子たちに

「こんなボロ屋に長い間、通つてください恐縮ですじや。かぐや姫に『早く孫の顔が見たいから貴公子たちの誰かに嫁いで儂を安心させておくれ』と言いましたところ、かぐや姫は『私が希望するものをちゃんと持つてきた人と結婚することにします』といいました。私はそれに賛成しましたが皆様はどう思われますかな？」

と、嘘ばっかり並べ、貴公子たちに合つてるような、合つてないような説明をしました。

貴公子たちは、話を聞いて

まあ、金に物言わせりやなんとなるだらう

と思い、その条件を飲みました。

貴公子たちも性格が何だか最悪な予感です。

お金持ちの考えることは分かりませんね。

して、それを聞いたかぐや姫はにやりとほくそ笑み、自分が欲しい

ものをお爺さんに伝えました。

「噂に聞いたんだけどさー、天竺辺りに、仏の尊い石の鉢、とか言うのがあるらしいの一。『石』繫がりで、石造りの皇子に頼んでー。でさでさ、何かね東の海に蓬萊つて山があるらしいの一。そこに、茎が金で、実が真珠の木、があるらしいの。この前通販で頼んだら偽物で、みんなプラスチックでてきてたから、本物のそれがほしいなー。あ、それ庫持の皇子だつけ? そいつにやつてもらおうつとあ、一枝でもいいからさ。」

何だか現実に無いようなものばかり頼むかぐや姫。
実際、噂話で本当にあるか疑わしいものを希望しています。
お爺さんは、まさかこんな難題が出てくると思わず、啞然としてしまい、返す言葉がありません。

そんなお爺さんのことなど眼中に無いかぐや姫の要望はまだ続ります。

「あと唐にある、火鼠の皮衣、だつけ? それを、あーあれ。あの人によらせて。大伴の大納言とか言う人には、‘龍の頸に五色に光る珠’を取つてこさせて。石上の中納言には、燕が持つてる子安貝、を一つ。そんなところかなー。」

お爺さんは、かぐや姫の要望を聞いて、たいそう驚きました。
こんな現実離れしたもの、誰が持つてこようかと、儂の老後の暮らしさじうなるのか、と思いまして、かぐや姫に再確認することにしました。

こんなこと言われたら誰だつて嘘であつて欲しいと願つのです。

「不可能なよ「うな」とばつかりじやの「。そもそもこの国に無いものばかりですじや。今一度考え方直してみなさらんか?」

お爺さんがなるべく優しく、かぐや姫の機嫌を取るよつこやつ言つてました。

が、かぐや姫は不機嫌そうな顔をして

「はあ？ 難しいわけないじゃん。私のこと好きなら簡単でしょ？ 這是地球を救つてよく言つじゃん？ だつたらそのへりこおなじ御用じゃないのー？」

なんて言つものですから、お爺さんは仕方なく貴公子たちに事情を説明することにしました。

この事をお爺さんから聞いた貴公子たちは

せめて『一度と家の周りに来ないで下さい。次来たら警察行きです』とでも言つてくれたほうが気が楽だったのに…

と思ふ、しょんぼりして帰つていきました。

被害者、石造りの皇子

石造りの皇子は悩んでいました。

あんな無理難題を言わされましたが、それでもかぐや姫をどうしても手に入れたくて、むしろ手に入れないこの世に生きている心地がしないくらいです。

そして、たとえ天竺にあるものでも彼女の為に持つてこようと決意しました。

しかし…

いや、待てよ。天竺にも一つと無いものをどうして手に入れることが出来ようか

という考えが頭に過ぎり、かぐや姫には

「今日天竺に旅立ちます。行つてきます。」

と知らせておいて三年間その辺をぶらぶらして暇を潰しました。暇を潰すにはあまりにも長い時間です。

そして三年後、大和の国十市郡にある山寺で寶頭盧の前にある、真っ黒になつた、それこそ触りたくないほどのすす墨が付いている鉢を手に入れ、錦の袋に入れてかぐや姫にもつて行きました。かぐや姫は、

え？ マジで持つてきたの？ ありえなくね？ ぶつちやけありえないよね？

と、半信半疑でその鉢を見ると中に手紙が入っていました。広げてみると

『海山の道に心をつくし果てないしのはちの涙ながれき（訳*筑波の国を出て、山越え海越え野を越えて、血の滲む思いをして天竺にたどり着き、どうにかこつにか鉢を手に入れてきました。決して日本のかの寺でとつてきたんぢゃありません。本當です、信じてください。 石造りの皇子より）』

と歌が書いてありました。

なんだか余計な訳がみえるので、偽物なのが諸バレです。

それでも、一応かぐや姫は、石の鉢にあると言われている光があるのかと確認しましたが、偽物なのでそんな光は何処にもありません。そこで、かぐや姫は石造りの皇子に

『しら山にあへば光の失するかとはちを捨ててもたのまるかな（訳*偽物じゃん。光とか一筋も見えないんですけど。今の今まで何してたの？ウザインですけど、私に見る目がないとでも思つてたんですけどあ？マジふざけんなし。鉢のせいで手が汚れたし。）』

と返歌し、真っ黒な鉢も返しました。

石造りの皇子は鉢を門の所に捨て置き、わらじの歌に返歌しました。

『しら山にあへば光の失するかとはちを捨ててもたのまるかな（訳*貴女様があまりに美しいからきっと光も消えてしまったのでしょ。私もそんな鉢をすてました。そして恥を捨てて貴女様の御心にすがりつきたい。私と結婚してください、お願ひだから（泣）』

が、かぐや姫はたいそう立腹で

「そんなこと言われても今更何？つて感じなんですか？——。言つて

ルヒヒが何かキモイしー。」

と言ひて返歌しませんでした。完全無視です。
石造りの皇子はこれ以上どうする」とも出来ずにつボトボと帰つて
いました。

因みに、鉢を捨ててまた言ひ寄つたことから、厚かましいヒヒを「
恥を捨てしむ」とこうようになつたやうです。
厚かましこのはかぐや姫の氣もしますが…。

策略！庫持の皇子の陰謀――（一）

庫持の皇子は大変な策略家でした。

まず朝廷には「筑紫の国で温泉療養してきます。最近肩こり、腰痛が酷くて。」と、言つておきました。

そして、かぐや姫には「玉の枝を取りに行つてくるから。」と使いに言わせて地方に下ろすとするので、お供の者たちは、難波までお見送りに行きました。

庫持の皇子は

「少数で行かないと。こんなにぞろぞろくついてきたら邪魔くさいよ。」

と、くつついてきたお供たちに酷いことを言つて、親しい少数の人を連れて船に乗り、旅立ちました。

そして見送った人たちは「よよよ……どうかご無事で～」と言い残し、都に帰つていきました。

しかーし！！

お供の人達は皆騙されていたのです！

3日後、誰もお供の人たちが居なくなつた頃を見計らい、庫持の皇子は帰つてきました。

そして、庫持の皇子は例の計画を実行することにしました。

その名も『玉の枝でつちあげ作戦』です。

あらかじめ命じていた、この当時は随一の宝とされていた鍛冶細工師6人を呼びつけて、人の近づかないような家（どんな家なのかは

ご想像にお任せします)を作り、かまどを作り、仕事場にしました。そこに、6人を閉じ込めて働かせ、自分も同じところに住んで、6人の仕事振りを監視しました。

庫持の皇子は、治めている莊園十六箇所を初めとし、蔵の財産やら何やら大層お金をつき込み、玉の枝を作らせました。

こんなにお金をつき込むのでは、きっとお爺さんとしては莊園をそのまま貰つた方が喜ぶでしょうが、かぐや姫の要望なのでそういう訳にもいきません。

そしてついに、かぐや姫の言つていたのと寸分違わず玉の枝を作りあげ、ひそかに難波に運びこみました。

「ただいまー、船に乗つて帰つてきたよー。あー疲れた。」

と、自分の屋敷に使いをやり、自分はその場に酷く疲れた様子で座り込んでいました。

息切れしてるように見えるのは演技です。かえつてわざとらしいですが。

そこへ、迎えの人々が行きと同様にぞろぞろやつてきました。

迎えに来た人々は、自分達にお土産が無い事を不満に思いましたが、仕方なくこのグタグタな主人を屋敷に運んであげました。

そして、でつちあげた玉の枝は長櫈に入れて、風呂敷でくるんで都に運びました。

でも、持つて行くのでは途中盗賊とかに襲われる心配があるので、先に都にある自分の屋敷に送つておくことにしました。

もちろん速達です。しかも書留で。

まるで受験生が願書を送るような送り方です。

そういうところに抜かりが無いのが庫持の皇子といつ人なのです。

さてさて、いつの間にやら庫持の皇子がこの玉の枝を都に持つて

きたという噂が世間に広まり「庫持の皇子が優曇華の花を持つてきましたそだ。」と騒がれています。

マスコミも真偽のほどを確かめようと走り回っています。

しかし、この噂を聞いたかぐや姫は喜びもせず、かえつて不快に思つていました。

何で、この世にないもの頼んだはずなのに持つてくるわけ？玉の枝なんてあるわけないじゃん。通販カタログにも‘伝説の玉の枝’って書いてあつたのに。伝説つてことはないんじゃないの？あれ？あれ？ちょー、やばいんですけどー。

庫持の皇子も酷いですが、かぐや姫も酷い！

策略！庫持の皇子の陰謀……（一）

「いやしてかぐや姫が動搖を隠し切れないでいるといふ、庫持の皇子がにやにやと「我にやかぐや姫を得たり」とこつ顔でやつきました。

わざわざ使この者に、かぐや姫宅のインターホンを押せせ、

「旅から今帰つてきました。旅の姿のままで申し訳有りませ」

と言いました。

お爺さんはこれを聞き、玄関先で庫持の皇子と会い、立ち話を始めました。

散々世間話をした後に庫持の皇子が

「命を捨ててこの玉の枝を取つてきました。我が妻……いえ、かぐや姫にお見せください。」

と言つて、お爺さんに玉の枝を渡しました。
玉の枝には手紙が結び付けてあります。

早速お爺さんはかぐや姫に玉の枝を見せました。

かぐや姫は玉の枝に結び付けてある手紙をとつて広げました。そこには、

『いたづらに身はなしつとも玉の枝を手折らでただに帰りやせまし（訳*この身が朽ちようと果てようとも、何があろうと絶対に手ぶらで帰るなどしなかつたでしょ）。さあ、この私と結婚してください。他の者では貴方を幸せに出来ません）』

と書いてありました。

訳はいさか深読みの気もしますが。

なんか益々うざこんですけどー。

といつのが、かぐや姫がこの歌を見た第一印象でした。

翁はかぐや姫の隣でうつとうしごくらこに、にじにじしてします。
そしてかぐや姫に

「かぐや姫や、お前が言った蓬萊の玉の枝を、こんな素晴らしいもの
のを寸分違わずに持つてきてくれたぞい。これがあるだけでも儂の
老後は安泰じや。こんなものを儂たちにくれたんだからこの人に嫁
ぎなさい。それに旅をした後に直接大急ぎでお前の元へやつってきた
のだ。きっとお前に尽くしてくれる人に違いない。そんな人だから
儂と婆さんの面倒も見てくれるじゃろう。老人ホーム送りとかしな
やせうだから、絶対この人に。」

としました。

半分以上が私欲からこの人を勧めています。かぐや姫の幸せなど一
の次でお金しか頭にありません。

いつのまにか玉の枝を自分の懷に入れていますし、強欲なお爺さん
です。

それを聞いたかぐや姫は…といつより聞いていたんだか聞いていな
かつたんだかどちらともとれない態度で珍しく頬杖をついてぼーつ
としています。

「これ、かぐや姫や聞いておるのか」

「……あ、『めん大音量で音楽聴いてた。』

そう言つなり耳からイヤホンを外すかぐや姫。

やつぱりかぐや姫はかぐや姫です。どうやら先ほどウザイ歌を見てしまつたので音楽を聴いて気持ちを落ち着けようとしてたようです。

はてさて、かぐや姫の気分を害すよつた歌を贈つた庫持の皇子は
とこつと

「こんな頑張つて玉の枝を取つてきたんだからもう嫌とは言へない
よなあ？」

とこつやいなや縁側に這い上がつてきました。

此処までくるとストーカー行為プラス不法侵入と罪は重くなります
が、じうして玉の枝をとつてきたのだから身内同然だらうというの
が庫持の皇子の考えでした。

お爺さんもこの考えに賛成で、

「何とも素晴らしい玉の枝です！このたびは儂もかぐや姫も喜んで
おります。今回はどうして断れましょつか、はつまつ、めでた
いめでたい。」

と言い、庫持の皇子と一人で呵呵大笑しています。
この頭があめでたい一人の横でかぐや姫は、

きーーーーー！ホントにうざい、マジうざい。じじいも何なの？人の
気持ちも知らないで！だいたいさ、嫁ぐ気なんて更々無かつたけど
じじいたちの言つこと聞かないでずっと断つてんのも氣の毒だから
無理難題だして断つうとしてんのに！

と、庫持の皇子が玉の枝を持つてきただけを悪々しく思つていまし
た。

ぼーっとしているように見えますが、実際は庫持の皇子に対して腸が煮えくり返っているのです。

そんなこととは露知らず、翁は若い一人の為に寝床の準備を始めました。

：つて何でいきなり寝床なのさー！

策略！庫持の皇子の陰謀……（II）

お爺さんは、一人の寝床の準備をしながら、庫持の皇子の話を聞いて……と言つてもでつち上げの旅話ですが、じゅうとそれに騙されてしまい、庫持の皇子に歌を詠みました。

『くれ竹のよよの竹取り野山にもさやはわびしきふしをのみ見し（訳*竹ばかり昔からとつてきた私ですが、そんな辛い日は野山でも会いませんでした。決して仕事をサボつていたわけではなくて）』

この歌を聞いた、庫持の皇子は「いやいや、どんな苦しみも、かぐや姫を妻に出来る日の日を思えばビートことがあります」ことありませんでした。

と、散々苦労話ををしておいてからそんなことを言つて

『わがたもとけふかわければわびしさのちぐさの数も忘られぬべし（訳*苦しんで流した涙もすっかり乾いてしまったようです。そんな事はいいからかぐや姫をよこしなさい）』

と返歌しました。

こんな和やかなムードで、うふふ、あははとやつていたその時です
！――

六人の男達が庭に現れました。

お爺さんは突然のことに驚いて「誰だ！」と声を上げました。

その一声を待つていたかのように男六人組は決めポーズをとつ、

「六人合わせて、給料欲しいんジャーハー！」

と言いました。

きつとこの人たちは日曜日の朝にやっている戦隊モノの見過ぎなんでしょう。

この、給料欲しいんジャー、のレッド的存在の人が前に出てきてお爺さんと庫持の皇子に言つことに

「私の名は内匠寮の細工人、漢部の内磨と言つものです。そこの皇子様にお仕えし、玉の木を作つていました。飲まず食わずに急いで作り上げたというのに、低賃金どころか一文もくれません。こんな人が高い役職にいるから日本の未来はお先真つ暗なのです、と言われたくなればとつと仕事に見合つ給料を下へ。もう心も体もボロボロです。」

だそうです。

心も体もボロボロの割には決めポーズしたりと元気が有り余つているように見えますが、とにかく給料を払わずに働かせるのはけしからんことです。

漢部の内磨はさうにポケットから文を取り出して差し出しました。

「これはどうじつとなのかのう？」

頭にクエスチョンマークを浮かべ、首を傾げ、庫持の皇子の顔は見る見る青ざめていきます。

そこへ、かぐや姫がやってきて文を受け取りました。
手紙を広げてみると

『庫持の皇子は千日の間、私達と一緒に家に住み、『じんじんしながら私達を監視し、玉の枝を作らせました。出来上がつたら官職を与えようなどと言つておきながら一文もくれません。今考えると作つた玉の枝は、貴女が求めていたものかと。あの人気が給料をくれない

のなり、もつ身内同然になつた貴女から給料を頂戴したいと思いま
す。』

と、書いてありました。

かぐや姫はこの手紙を見て、こつこつと爽やかな笑みを浮かべ

「ええ。とーぜん高い給料は支払われるべきでしょ。」

と言つて、鬼の首を獲つたかのように庫持の皇子に向つてこやつと
笑い、お爺さんに

「ねー、じじー。」といつ偽物で私のことだまそつとしたよ。オレ
オレ詐欺とかキヤツチセールスとか靈感商法よりたち悪いー。もう
最悪つて感じー。こんな人に嫁がせる気? きっと最初は良い顔して
ても、後々わかんないよ? こんな嘘つきよ。」

と言いました。

お爺さんも納得して、懷から玉の枝を出し

「人に作らせたやつなら値打ちは低いし、ちょっともつたいたい気
もしますが、返すのは本物よりたやすいのう。」

そう言いながら玉の枝を投げて返しました。
かぐや姫の心は晴れ晴れし

『まいとかと聞きて見つれば言の葉を飾れる玉の枝にぞありける(訳* 結局偽物じゃん。ちゅーウケるんですけど。残念でしたー。危うく引っかかるところだったけどー、マジ危なかつたけど、どんでも返しありたいな? 言葉を飾つたよつた玉の枝なんていらないつーの。)』

と返歌しました。

庫持の皇子は、田でお爺さんに助けを求めるましたが、あれほど意気投合していたお爺さんも今まで自分が騙されていたことを恥ずかしく思い、寝たふりをしていました。

かぐや姫はかぐや姫で、庫持の皇子の方を向いて勝ち誇った顔をしてにやにやしますから、どうすることも出来ません。庫持の皇子は、暫くどうすることも出来ずに座っていましたが、辺りが暗くなるのに乗じて逃げ帰つてゆきました。

…あれ？6人の給料は？

策略！ 庫持の皇子の陰謀---（四）

「あの……私達の給料は……」

と、ついたままで忘れ去っていた、給料ほしいんジャー、の情熱のレッドがボソリと呟きました。

それを聞いたかぐや姫は偉そうに「近づき、苦しうな」と言つて六人を自分のそばに呼んで、

「なんかありがとー。あんた達のおかげでちょ一助かつた。危うく一、あのキモイ人の嫁にされちゃうと」だつたしー。マジ感謝ー。」

と言つて、褒美をたくさん渡しました。それらの金銀財宝は全部お爺さんの所持品です。

騙されそうになつたお爺さんへのちよつとした嫌がらせのようです。褒美を受け取つた六人は何回もかぐや姫に感謝の言葉を言つて、屋敷を後にしました。

が、六人組はこの後酷い目に合つてになります。

「よかつたな。ちゃんと褒美がもらえて。」

「うふうふ、金にならん仕事なんぞやつたくないものな。」

などと会話をしながら意氣揚々と帰り道を歩いていると、ちよつと人気の無いところで背後から何者かに襲われました。

襲つた連中は、彼らをボコボコに殴り、かぐや姫に貰つた褒美までとりあげてしまつたのです。

「な…貴様ひは、誰なんぢや…」

「ふふ、良い氣味よのう。私はこれだけしてもまだまだ、おぬし達への恨みは晴らせぬわ。」

月明かりに照らされて、やらうと其処に立っていたのは庫持の皇子でした。

怒りとも、悲しみともつかない表情で未だ、自分の家来に殴られている6人組を見て、フツと氣の抜けたような笑みを浮かべ

「こよのうな事をしていることも、かぐや姫を得られなかつたことも一生の恥だなあ。どれくらい恥ずかしいかというと、皆の前で黒板消しトラップに引っ掛けてしまつたくらい恥ずかしいわ。きっと世間の人が私のことを笑いものにするだろ?」

と言つて、その場からいなくなつてしまひました。

その後、仕えていたものたちや、知り合い、近所の人たちなどなど皆で色々なところを捜しましたが見つかりませんでした。

そのうち人々も

「さつと死んじやつたんだよ。あんなことしたら恥ずかしいものー。」

」

と言つて捜索をやめてしまひましたが、実は彼は死んでいませんでした。

恥ずかしさのあまり、身を隠していたのです。

皆は一体何処を捜していったのでしょうか?

大きく勝負に出て、策略にも長けてるくせに、氣の小さい皇子なのでした。

敢え無い！阿部のみむらじーー（一）

右大臣安部のみむらじは、財力があつて一族が繁栄していました。有名な、言わすと知れたお金持ちのお坊ちゃんなのです。

そんな彼が、かぐや姫から頼まれた品は、火鼠の皮衣、でした。

そんなもの、日本にあるわけ無いよな…。もし亀井は私の一族が手にしているはずだし…

と思い、その年にやつてきた唐の貿易船の持ち主である王慶という人に

『今、日本にとてつもない美人で美しい姫がいるんです。彼女を娶る為には、火鼠の皮衣、とか言つのが必要なんです。是非それを買ってきて送つてください。』

とお手紙を書いて、信用の置ける小野の房守という人を手紙に添えて派遣しました。

房守は、

げつ！？なんで俺が行かなきやなの？自分で行けよ！

と思いながらも中国に行き、王慶に手紙と金を渡しました。

王慶は手紙を広げて「美人」と「美しい」は同じ意味じゃないですか？といつことはあえて指摘せずに、返事を書くことにしました。

『そんなものこの国でも噂だけで見たことは有りません。もしこの世にあるなら人がこの国にもつてきてもよさそうなものですね。非常に

に難しい商いです。ですが、ひょっとしたら天竺のお金持ち辺りが持つてるかもしません。尋ねてきましょう。もし無いのなら頂いた金は返します。それと、貴方のよこした使いの者が毎日愚痴を言つてうるさいんですけど、どうしたらいいですか?』

その唐の国からついに船がやつてきました。

「小野の房守が帰朝して、京へ上つてくる」ということを右大臣安部のみむらじは聞いて、急いで自慢のスポーツカーを走らせて迎えに行きました。

途中、スピード違反に対する検問をやつていて、追いかけられましたが、振り切つてきました。

まあ、この駿馬ならぬスポーツカーのおかげで房守は筑波から7日間で帰つてこれたわけです。

「ただいま、帰りましたー。これ手紙と例のものですー。」

そう言つて、それらを差し出す房守に

「お前、散々向こうで愚痴漏らしてたろ?」

と言つて拳骨をくれて、それらを受け取りました。
そこに書いてあることには

『やつとのことで、火鼠の皮衣、の皮衣を手に入れました。ひ一疲れた。全く年寄りになんて重労働を…まあ搜したのは家来で私は何もしてないけど(^__^) 容易に手に入れられるものじゃ有りませんでした(^__^) 「昔々、天竺の聖職者がこれを身につけて唐にやってきて、それが唐の山寺にある」と聞いて、やつとのことで

買い取つてのお届けです（。 ＜＊） 「対価の金が少ない」と
か言われましたが、そこは私が立替ときました（、・・）ですから
あと五十両のお金を持戴したいのです（、・・・）もしお金を下
さらなこのであれば皮衣を返してください（――）』

と、書いてあるのを見て右大臣安部のみむらじは

「何をお思ににならのか。あと少しのお金ではないか。嬉しい限り
だ。」

と言つて、唐の方角にお辞儀をしました。

「とにかく小野の房^{サカイ}さん？」

「へこ、なんでしょ」

「向ひでH慶さんに顔文字教えてたでしょ。相当暇してたんだね。

」

「こえ、そんなことば（・・・・）」

「いいよ、バレバレだから……」

敢え無い一阿部のみむらじーー（一）

右大臣安部のみむらじは早速、王慶が送つてくれた、火鼠の皮衣、とやらを見るために包んであつた風呂敷を解きました。その品は箱に入つていたのですが、まあその箱というのもとても立派で様々な瑠璃を混ぜて細工してあります。この箱だけでも相当な価値があるものと思われます。

そして、肝心の中身である、火鼠の皮衣、ですが、こちらもまた立派で紺青でありながら毛の先は金色に輝いてました。こんな立派なものは見たこともあります。

鑑定に出せば必ず「いい仕事してますねえ」なんて言われそうなくらいすごい貴重な品のようと思われました。もう、火に焼けないとかそんなのが問題じゃなく、どういつたら良いかわかりませんが、とにかく凄いんです。

その美しさには右大臣安部のみむらじも惚れ惚れしてしまいました。こんなお宝は私の家で保存しておきたいと思いつつも

嗚呼、成る程。このよつたな品ならかぐや姫もさぞ欲しがるだろ。毛皮店に行つてもこのよつたな品は拝めまい。

などと考え、この品を送つてくれた王慶が居る唐の方を向いてもう一度お辞儀をしました。

その後、すぐに、火鼠の皮衣、を箱の中にしまい、木の枝につけ、自身の化粧をして、

今日はこのままかぐや姫宅にお泊りだな。うつしつしー

と思い、歌を添えて持つて「くー」とこしました。

その歌は

『かぎりなき思ひに焼けぬ皮衣袂かはきて今日いひやせ着め（訳*今までの思いは火のように燃え上がって、濡れていた衣も乾くでしょう。心地よい着物で初夜が過ごせそうですねえ。）』

と、詠んでありました。

右大臣安部のみむらじは皮衣を持つて、かぐや姫宅の前で立っていました。

近所の人には「あの人何かしら～？門番かしら～」とこつこつと見られていても、まったく気にしません。

そのうち、お爺さんが出てきて例の品を受け取り、かぐや姫に見せるために家の中に入つていきました。

かぐや姫は、おじいさんからそれを受け取り、せつかく右大臣安部のみむらじが詠んだ歌は「何か下心まーるみえー」と書いてポイッと投げ捨て、箱の装飾も気にせずに、火鼠の皮衣の品定めを始めました。

「立派な皮に見えるけどー、立派過ぎるつていうかイメージと違つつていうかー。てかー、本物かわかんないしー。」

そんな事をぼやくかぐや姫に対してもお爺さんは

「とにかくーあのお方を招き入れてあげなさい。世間では類を見ない立派な衣じや。お前がそつやつて結婚を断つて世間の人を惑わせるのはよくないことだぞ。なんせ儂の夢見たリッチな生活が中々果たせないのじやから。」

「思いつきつ私欲じやんーー。」

そんなこんなで右大臣安部のみむらじを座敷に呼んで座りました。

今度こそ、今度こそかぐや姫を結婚させて豊かで安定して安心した生活を…

と、お爺さんだけでなく厚化粧して出てきた以来出てこなかつたお婆さんもそう思つていました。

夢の生活が出来ないこと…いえ、かぐや姫が結婚しないことを一人は大変嘆かわしく思つていたのです。

「身分の高い人と結婚させて、自分達の身分も高く…」なんて思つて画策するのですが、かぐや姫が遠まわしに「嫌~」というので、強制できずに居ました。

だからこの期待も最もなのです。

敢え無い一阿部のみむらじーー(II)

あれこれと出世と金儲けしか考えてないお爺さんに対し、かぐや姫は結婚したくないからどうにかしなければいけないとこう事ばかり考えていました。

かぐや姫は「存知の通り家庭に縛られるタイプではありませんし、結婚したら今皆が持つていてる自分の清純なイメージが崩れてしまうことを、彼女は自分自身でよく理解していました。

そこで、かぐや姫は右大臣安部のみむらじが持ってきた、火鼠の皮衣、を実際に焼いてみようとお爺さんに提案しました。

お爺さんはそんなこともちらりん反対でしたが

「だーいじょうぶだつて。本物なら焼けないじゃん? それで偽物かどうか分かるんだから安いもんじゃーん」

と意のほかぐや姫に押し切られてしましました。

一応、お爺さんは右大臣安部のみむらじのところに「かぐや姫がこのように言つてますが…」と言いにいくと、右大臣安部のみむらじは「この皮は唐の王慶さんにまで協力してもらひ天竺から仕入れたものです。絶対に本物ですから、焼いちゃつても構いません。どうせ焼けないでしようか」。

というので、実際に燃やしてみることにしました。

かぐや姫は右大臣安部のみむらじが自信満々なので本物だつたらどうしようかとドキドキしていましたが、とりあえず自分の懐から護身用のジッポのライターを出して火をつけてみました。何故、護身用にライターなのか、何から身を護るかなどは謎ですが。

ともかく、火をつけた皮衣は普通に燃えてしまったのです。

「やっぱ偽物じゃーん。また騙されそうになるとか私どんだけー。
そういう星の元こうまれたんかなー？」

結婚しなくて済むということから清々しい顔をしてそんなことを言うかぐや姫の横で、右大臣安部のみむらじは顔が草の葉の色になつて座っています。

青ざめるの通り越して草の葉の色なんて重症です。

安部のみむらじを見て、ちょっと哀れに思つたのか、かぐや姫は箱に歌を入れて返しました。

『なごりなく燃ゆと知りせば皮衣思ひのほかにおきて見ましを（訳

* うちに持つてくるくらこなら觀賞してりやーよかつたのにー』（『

ごもつともな意見を言われ、言い返す術もなく安部のみむらじはボトボと帰つていきました。

この一件の後、世間の人はかぐや姫宅の人に「結婚するの?」とか「皮衣の噂は本当?」とか色々聞きまくつたのですが「火鼠の皮衣は偽物で燃えちゃったから結婚しないよー」と言われたので、この一件のように、やつ遂げられないものを「安部」にちなんで「あへなし」と言つようになつたとかならないとか。

俺様的な大伴御行の大納言（一）

‘龍の頸の玉’なんていう最もありそうにないものを頼まれた大伴御行の大納言は、自分の家に居る人たちを呼び集めて

「龍の頸に五色の光を放つ珠があるらしい。それを取つて献上する者がいたら願いを叶えてやつてもいいかなー」

としました。

どうやら大伴御行の大納言は自分で取りに行く気なんて更々ないようです。お金持ちは面倒臭がりなんでしょうか？

その話を聞いて家来達は

「何でも叶えてくれるというのは有難いチャンスでござります。しかし、龍の頸の玉、ですって？本当にそんなものあるのでしょうか？というより仮にあつたとしても相手は龍ですよ？とる前に命を落としたりでもしたら妻や子供達が悲しみます。無理です。もっと簡単なものにしてください。」

としました。

「そうだ、そうだー」という声が家来達の声が聞こえる中、大伴御行の大納言は着物の裾から一枚の紙を取り出し、家来達に見せ付けました。

「皆のもの、これが目に入らぬとは言わせぬぞ？」

「そ、それは！？」

一枚の紙、それは家来達との契約書だったのです。

大伴御行の大納言は、ニヤリと笑つて契約内容を読み上げ始めました。

「ここの契約書にはなあ『主君に仕えるという事は主君のために命を投げ出す覚悟を決めて仕える』とか『主君の命令は絶対』とかその他色々書いてあるぞ？まさか読まずに契約したわけではあるまいなあ？」

「ま、待つてくれ！本当にそんなこと契約書に書いてあつたか？」

皆が不満や疑問でざわざわと騒ぎだしたところに、これが証拠だと言わんばかりに一人一人が交わした契約書を配り始めました。

「ちょっと待つてくれ、そんな事は一言も書いてな」

「ふん、お前達の目は節穴か？目を凝らしてよーく見るがいい。」

目を凝らしても何も見えないと言つ不満が聞こえてきたところで大伴御行の大納言は虫眼鏡を配りました。

虫眼鏡で契約書の下のほうを見ると、なんと先程大伴御行の大納言が言つたことが書いてあるではありませんか！

「さらに炙り出しで契約内容が浮かび上がるようになつていてるから消そうとしたつて無駄だぞ。」

何と姑息な！

暴君です！悪徳商法じみてます！！

「どうだ、分かっただろ？お前達が俺様に仕えるという事は命を君主のために差し出しても構わんと言う事だ。この国にもない、か

といつて唐や天竺のものでもない。何故なら龍は動き回るものだから。遭遇確率もある。取るのは他のものが出来された課題より簡単かと思われる。これでも行けないと申すか！行けないと云つたら打ち首だ！」

正真正銘の暴君です！

走れメロスに出てくる王様もさすがにこの人には敵わないでしょ。家来達も仕方なしにこの命令に従つ事にしました。

「そういうことなら、仕方ありません。例えどんな困難が待ち受けているようとも命に代えて任務を遂行しましょう。」

「やうだよなー。」この私に仕えていると世間の人は知つてゐるし、もし俺様の命令に背いたとしたら世間からはどつとう田で見られるのかちやーんと分かつてゐるよな？」

「め、滅相もござこません！」

「なら宜しい。あーはつはつはつ！」

すっかり機嫌が良くなつた大伴御行の大納言は大口を開けて笑っています。

家来達は相当頭にきていたのですが、ここで打ち首になつたり職を辞めさせられてしまえば家族が路頭に迷う事になるので逆らう事が出来ませんでした。

家来達は任務遂行の為の旅支度をし、門の前に集合しました。

大伴御行の大納言は、いつもの派手な着物を着て門の前で皆を待ち、皆が揃つたところで食糧やお金などを渡しました。

そうです、旅支度もしないで皆に物資を配ると云う事は、しつこい

ようですが、この人は旅に行く気なんて更々ないのです。
それを裏付けるかのようだ

「俺様は家で潔斎でもしてこよ。あ、お前ら龍の頸の玉取つてく
るまで帰つてくんないよ。」

潔斎とは酒や肉食などを謹んで心身を清める事です。
旅に出る家来達に比べればなんと楽なことでしょう。
家来達は、嫌な顔をしつつも屋敷から出発しました。

とは言つものの、何処にいるか分からぬ龍を探して行くのですか
ら、当然どつちに行つてよいか分かるはずもありません。
そこで家来達は

「『龍の頸の玉を取るまで帰つてくるな』なんていつのだからこの
際どつちの方向でも構わない。思い思いの方向に歩いてみよ。」

と言つて適当な方角に歩き始めました。

「なんと、無茶な事をこつものだ」

「考えなしだ。」

「「」となしそーもない命令をするなんて納得できない

と、悪口を言いながら旅路を進んで行つたことはいつまでもあります。
せん。

何でこんな主君に仕えちゃつたんでしょうな?

俺様的な大伴御行の大納言（一）

さてさて、家来達が旅に行つてゐる間に大伴御行の大納言はかぐや姫を迎えるんじや普通の家では見苦しいかな？

なんて、迎えることが決まつたわけでもないのにしょーもない心配をして、屋敷を劇的に改造することにしました。

改造というより、建て直しです。

立派な建物を作り、漆を塗り、蒔絵で壁を作り、屋根を装飾し、とても言葉では言い表せないような素敵な家にしました。

こんな家に住まわしてくれるとなれば、どんな女性でもイチコロで結婚を承諾するでしょう。

ところで、大伴御行の大納言には妻…いえ妻達が居ました。かぐや姫を迎えるとなれば、妻達は目の上のたんこぶ、非常に邪魔です。

大伴御行の大納言は妻達に高額なお金を渡し、家から追い出してしまいました。

あんまりです。

ですから、大伴御行の大納言は立て直した豪華な屋敷で一人吉報を待つていたのでした。

ところが

何日経つても、年が明けても、家来達からは何の音沙汰も有りませんでした。当然といえば当然です。

待ち遠しくて、居ても経つてもいられなくなりまして大伴御行の大納言は自分の足で難波に行くことにしました。

身分がばれないように、変装して其処に行くと、其処に船人が居ました。

「もしそこの船人よ、大伴御行の大納言の家来が龍の頸の玉を取つたという噂などを聞いていないかね？」

と、たずねると

「変なことを言つんですね。そんなこと出来るわけありませんよ。そういうつた船の噂も聞いてませんし」

と言われてしまいました。

大伴御行の大納言は馬鹿にされたと思い

俺様の身分も知らずになんという無礼なことを言つのか。私ならば龍を殺して玉を手に入れられるものを

と考え、ついに臆病な家来など待たずに自分で行こうと決意しました。

船に乗つて、あちこちに揺られ、進み、随分先に行つてから行き先を筑波の方に定めたそうです。

どうしてお金持ちは先に自分で行動しないんでしょうかねえ？

俺様的な大伴御行の大納言（II）

先頭は仕方なく船を出しました。

暫く舟を漕いでいると、どうしたことでしょう。強い風が吹いてきて、波は荒れ、辺りは暗くなり、船も思うように進むことが出来なくなりました。雷も光っています。

大伴御行の大納言は船酔いで吐きそうになりましたが、

「おええええー。気持ち悪いー。今までになく船が揺れて…おえええー！どうなつてしまふんだらつ…おげえええー」

と言つています。喋るか吐くかどちらか一方に絞つて欲しいものです。これでは聞いている方も吐き気を催してしまいます。

文句も言いたくなりますが、こんな状況じゃ仕方ないですよね、と先頭が割り切つて言つことには

「私も長い間船に乗つていますが、こんな酷い日に合つたことはありません。おつとつと…このままでは船の転覆、もしくは雷に撃たれる可能性もあります。幸いにして神のた、たた助けがあつたとしても南海に吹きやられるでしょう。こんな有りもしないものを求めてこんな日に船を出せと言われる主人に仕えて無駄に命を落としそうですよ。ハハハ…」

と泣いて嫌味を言つています。こんな日に海に連れ出されれば、しかも死にそうな日に合えば誰だって恨み言を言いたくなるでしょう。それを聞いた大伴御行の大納言がこれを聞いて言つことには

「おええつ。ふ、船に乗つては船頭の言つ事を、聞くものだ。そ、それが頼りないことを申すでないつ！」

とか何なとか言つて逆ギレしています。

つまりは、船頭が何とかしる。私は船に乗つただけだし全部お前任せなんだからな！ということです。

なんという言い分でしょ。船頭だつて無理矢理この我儘大納言に借り出されただけなのに。むしろ非があるのは大伴御行の大納言の方です。

船頭は怒りを通り越し、呆れ果てて、このお馬鹿な大納言でも分かるような言い回しで、自分は無実だし、頼られても困るのだと言つことにしました。

「あのですね、私は神様じゃないんですよ？天候を操れるわけじゃないし、何も出来ないんです。きっと、龍を殺して玉を取るなどと言つてるから龍が怒つてやつてるんですよ。助かりたければ私にすがるより神に向つてお祈りなさいませ。」

「そうか、そうじょひ

单纯です。

大伴御行の大納言は早速神に向つて祈り始めました。

「おお、神様よお聞きください。愚かにも龍を殺そうとした俺様を許してください。これから俺様は改心して龍の毛一本動かすような真似はいたしません」

まずは自分の事を俺様というのを直せよと言いたくなりますが、それはさて置き、大伴御行の大納言はこれを千回も言いました。その甲斐があつたのかやつとのことで雷が止みなりました。

それでもまだ空は光つていて、強風が吹いています。

船頭は言いました。

「ほりみなさい。やつぱり龍の仕業だったんですよ。風は強いですけどね、良い方向に向って吹いてますよ。決して悪い方向じゃありません。良い方向に向って吹いてるんですよ」

「「めんなさい… もうしません、「めんなさい」

完璧なまでに怯えてしまって人の話なんか聞いたりやいません。

こづして3、4日間良い風が吹いて、無事に船は陸に着くことが出来ました。

砂浜を見ると播磨の明石の浜なのでありました。

大伴御行の大納言は

「南海の浜に吹き寄せられたのだろうか」

と思つて喘いで、伏してしまいました。

船の船頭があつきの者が国府に告げたけれども、国司がお見舞いに来ても、起き上がらずに船底に伏したままで。

松原に、筵を敷いて船から降ろすと、その時初めて

「嗚呼、南の海ではなかつたのか…」

と言つて起き上りました。

そしてその姿は重い風病のせいで腹はぽつこりと膨れ、目は酷く腫れています。

これを見て国司もあまりにこの姿が面白かったので笑つてしまつた

そうです。
笑われて当然かも。

俺様的な大伴御行の大納言（四）

はてさて、大伴御行の大納言自身が龍の頸の玉を取りに出掛け、失敗して帰つてきたということを風の噂に聞いた家来達は、あんな君主でも少しばかり心配になつてなのか、あるいはどんな痛い目にあつて戻つてきたのか見たいが為なのか、君主のところに戻る事にしました。

戻つてきた家来達が、言つ事には

「龍の頸の玉を取る事が出来ませんでしたので、今まで戻つてきました。大伴御行の大納言様も『玉を取る事は不可能だ』とお分かりになつたようなので、もつお咎めはないだらうと屋敷に戻つてまいりました。すいませんでした（棒読み）」

正当なことを言いつつ、身の保身もしています。そして加えて棒読みで「私は悪くない」というのをさり気無く主張しています。この家来達は結構やり手のようです。まあ、こんな暴君に仕えているのでから自分達がしつかりしていないといけないでしょうし、当たり前の事とも言えましょう。

それを聞いて大伴御行の大納言は体を起こして、

「おお、お前達よ。よく持ち帰らないでいてくれた。あの頸の玉を取つたらどのような災いが起こるか分からぬよ。あの頸の玉を取つうと考えただけでこのような日に合つたというのに…おう、おそろしや。こうなつたのもあのかぐや姫とか言つ悪党のせいだ。顔も見せないくせに人にあれやこれを取つて来いと言い、殺そうとしてるのだ。お前達も気をつける、一度とあの家の前を通るでない。俺様も気をつけよう」

そうです、良く気付きました。すべては我儘姫のかぐや姫が諸悪の根源なのです。

未だに自分の「こと」を俺様と言つのは直つていませんが、かぐや姫が悪いという事を良く理解したのは登場人物の中でもこの大伴御行の大納言が一番でしょう。

その点は誉めてもいいのかかもしれません。

大伴御行の大納言は十分に反省し、戻ってきた家来達に褒美を渡しました。

こんな話を聞いて、別れてしまつた奥さんは大笑いです。糸を葺かせて造つた屋根も、鳥に巣の材料として持つていかれました。

大伴御行の大納言は殆んどのものを失つてしまつたのでした。

世間の人たちが言つには

「大伴御行の大納言は龍の頸の玉を取りに行つて戻つてきたそうじやないか」

「いやいや、身につけていたのは一つの眼に李のよつた玉だよ」

「ああ食べ難いことを」

と言いました。この「食べ難い」が「耐え難し」の語源で、常識外れで出来ない事を指すようになったんだとか。詳しい事は分かりませんがね。

燕巣スープ?いや、子安貝。石上の中納言（一）

さてさて、中納言石上麻呂足向て言つ長つたらじこ名前を持ち主が頼まれたものは「燕の子安貝」でした。こんな漢字ばかりの名前もややこしいので石上の中納言と呼ぶ事にしましょう。

石上の中納言は「燕の子安貝」と聞いて、

なんか簡単そうだなー。子安貝って安産のお守りだったような…はっ！？もしかして僕に氣があるからこのようなものを頼むのでは！？

なんて思つていました。

石上の中納言は酷い「妄想壁」があるようです。

他の貴公子達と同様、自分で動くのは億劫なので、家来のいる所へ行き

「あのそ、燕が巣を作つたら僕に教えて欲しいんだけど

と言いました。

家来達はそれを聞いて首を傾げて

「何にお使いになるんですか？日本で取れる燕の巣はスープには出来ませんよ？スープにするのは種類の違う燕のようですから……」

「違つ…違つ…」

家来の言葉を聞き、石上の中納言は首を大きく横に振りました。

「ち・が・う・の・…・いいかい？僕の丈夫な子を産もうとしてい

る人がいるんだよ！是非ともその子に燕の子安貝を取つて持つて行つてあげたいんだよ！」

と、妄想をたつぱり練りこんだ説明をしました。

家来達は、

ああいつもの妄想が始まったよ

と思いつつ、せめてもの慈悲で石上の中納言に燕の子安貝なんてあるわけが無いといつ事を教えてあげることにしました。

「いいですか？たとえ燕を殺しても何処にも見当たらないものなのですよ？子安貝といつのは、子供を産む時に何処から子安貝をだすのでしょうか？」

「やうです、それに噂によると人が見よるとすみると無くなつてしまふとか」

そんな微妙に遠まわしな説得をしている最中に、偶然家来ではないけど面識のある人が通りがかりました。

「何の話ですか？おや燕の巣？もしやスープに…え？違う？子安貝をお探しなんですね。そういうことでしたら、諸国から集められた米や穀物を扱う役所の炊事場の建物のところに毎年沢山の燕が巣を作るところがあります。家来達に頼んで見張らせておけば、よろしいでしょ？沢山の燕ですから、子を産まないといつことはないかと…」

としました。

それを聞いた石上の中納言はぱあつと口を輝かせ

「ナイスアイデイーー！－いいよ、それグッドだよ－！－いい事教えてくれたよ－！」

と、喜ぶのでした。

家来達の説得も通じることなく、石上の中納言は他の家来達を20人くらい呼び寄せて「ちょっと、これこれこつこつ事情なんだけど行つて来い」ということだ遣いに出しました。

家来達は足場を組んだものの、そのあまりの高さに怯えてしまい、誰一人巣の中を覗こうとは思いませんでした。

有るか無いか分からぬものの為に危険なことをするなんて誰だってやりたくありません。

そんな事は露知らず、石上の中納言は「取つたか？子安貝取れたか？」としつこいくらいに屋敷から遣いを出して聞いてきます。

家来達はどうしようかと迷つた挙句

「そんなこと言われても、こんなに人が居たら燕だつて怯えて来ません」

と返事を出しました。

石上の中納言はこれを聞いて大層悩んでしまいました。

燕巣スープ?いや、子安貞。石上の中納言（一）

誰も燕の巣から子安貞を取つてこよつとこつ氣配はないし、燕の巣の中を覗いてみよつとこつ仮も眞無れそつなので、石上の中納言は困り果てていました。

どうしよう、このままじゃ愛しのマイバーに子安貞渡せないよ

すべてこの人の妄想ですが、ツツ「ミを入れているとキリが無さううなので敢えて無視でいきましょ」。

まあ、くだらない妄想に囚われ、頭を抱えてうんうんと悩んでいるところへ、燕の巣がある役場に勤めているくらつ麻呂といふ翁が「子安貞をとりたいならば策略をお教えしましょ」、と詫びの言ひで、石上の中納言の所にやってきました。

石上の中納言とくらつ麻呂の翁は部屋の隅に行き、額を寄せ合ひ、コソコソと話し合いを始めました。

「今的方法を見ていると非常にまずいですよ。家来達が言つよつてあんなに人が居ては燕たちも寄つて来ません。あんな足場など壊してしまつて、信用できる家来を一人だけ残し、燕が安心したところで取らせるべきです。」

石上の中納言は「グットアイデアだよ」と納得し、家来を一人残して他の者達を皆撤退されました。

普通の人なら言われるまでもなく、こんなに人が居ては燕は来ないと分かるはずですが、妄想の中で生きている彼には難しかったようです。

石上の中納言はくらつ麻呂の翁に聞きました。

「燕の巣に人をやるにせざのよつたなタイミングがいいのかなあ？」

これに、くらつ麻呂の翁曰く

「燕はですね、子を産もつとする時は尾を上げて7回回つてワンンチと鳴…きはしませんけど、とにかくその様に産み落とすように見えます。7回回つてるときに入をやりなさい。」

だそうです。

まあ、こんな聞くからに当てにならないような話を石上の中納言は信じ込んで、大喜びし、多くの人には知らせないで、役場にお忍びで行き、自分で燕たちの動向を見守りました。

まあ、疑う事を知らないというか、やっぱりボンボンは世間知らずなんですかね？

そつそく、くらつ麻呂の翁には

「僕の家来でもないのに良い事を教えてくれたね。これあげるよー！」

と言い、石上の中納言は自分が着ていた着物を脱いで彼に渡したそうです。

そして、「改めて夜になつたら、此處に来なさい」と言つて家に帰しました。

この翁が金品目的で嘘教えてる詐欺師だつたらびーするんでしちゃうねえ？

燕巣スープ?いや、子安貢。石上の中納言(II)

日が暮れたので石上の中納言が例の寮に居ると、あのくらひ麻呂とか言つ翁が言つたとおりに燕が巣を作っていました。嘘みたいですが、彼が言つたように燕が尾を浮かせてくるべると回っています。

チャーンス!

と思い、石上の中納言は大きなかじを用意して、その中に家来を入れて持ち上げました。うーん、この描写だけじゃ良く分からぬでしうから、補足すると井戸水汲む原理です。紐引つ張ると持ち上がる感じ。この時の為に石上の中納言は前々から用意をしていたのでした。

燕の巣の近くまで持ち上げられた家来は、燕の巣の中に手を入れましたが、何も見つかりません。

「たいちょー、何もないであります!」

「誰が隊長だ。誰が。もういい、僕しか出来そうにない、ちょっと降りろ!」

そう言つなり、石上の中納言は家来を籠から引き摺り下ろすと、自分が籠の中に入り家来達に持ち上げるよう命じました。

燕の巣の仲で未だに、燕はくるくる回っています。燕が後ろを向いた瞬間に石上の中納言は巣の中に手を突っ込み、そして歓喜の表情を浮かべました。

「やつた!—あつたよ!僕は何か掴んだ!—下ろして、下ろしてつ

「.....」

テンショウの高さといい、子供っぽい言動といい何となくウザくなつたので家来は持つていた紐をぱつと放しました。案の定籠は急降下。籠は壊れ、何とも美しくないかたちで石上の中納言は壊れた籠の下から這い出してくださいました。

「痛いよお～、何するんだよ～。僕は今と一つても機嫌がいいから何があつても許してあげちゃうけどさあ、普段の僕だったら切腹とか命じてるよ～？君の命だけじゃ済まないからね～？君の家族もみーんな廢だよー？」

イタイのはお前の頭だと言いたいのは山々ですが、何か物騒なことを言つてゐるので口に出すのは辞めませう。

とにかく、石上の中納言は手に何か握っているようです。本人は確認もせずに伝説の子安貝だと喜んでおりますが、果たして本当にそうなんでしょうか？

それを確認する前に、一つ確認。石上の中納言、立てません。這い出してきた体勢のままです。

「あのー、一体何をなさってるんで?」

「白々しいにねー、君たちはー君たちのせいで腰打つちやつたんだよー！」

どうやら落ちた瞬間に腰を強打し立てないようです。ギャグ漫画みたいな展開のくせして、こいつらではしつかり再起不能です。こんな莫迦殿はほつといて、問題なのはやはり彼の手に握られているものでしょ。ひ。

辺りはすっかり暗くなつてゐるので家来の一人が蠅燭を持ってきま

した。

蠅燭の灯り下で手を開いてみると、セリヒタたのは向ひ……

「…………」

「…………」

その手に握られていたのは燕の古い糞でありました。

「嘘だつて……よつともよつてこの僕がこんな汚いものを……つか向で子安貞じやないんだよ……」

「おこたわしも、手の中には貞じやないん? 貞がない……甲斐がない!」

甲斐なしさに向ひからり来てるところがわかれています。

「びーでもこいよー、そんなことばー」

燕巣スープ?いや、子安貝。石上の中納言(四)

自分の腰を犠牲にしてまで（成り行きですが）、掴んだものが実は貝ではなかつたと言つ事實にショックを受け、寝込んでしまいました。まあ、腰が再起不能ですから当たり前でしょ。子供っぽいことをして（こつものことですが）、求婚が駄目になつたことを、ナルシスト（プラス妄想壁）の石上の中納言は人々に知られるのを大層恐れています。

求婚より自分の悪い噂が流れてしまう方が正直嫌なのです。こうした経緯を、久々に登場するかぐや姫が聞いて、お見舞いの歌を贈りました。そこには、

『年を経て浪立ち寄らぬ住の江のまつかひなしと聞くはまことか（訳*落ちて腰打つて再起不能とか超ウケるーー私のところに子安貝持つてこない奴なんか待つ甲斐がないしー。）』

「貝」と、甲斐、が掛かっています。かぐや姫にしては上手い歌です。

「これはお見舞いの歌と言つのか？」という疑問は置いといて、石上の中納言はこの歌を見て、家来に紙を持たせ苦しい気持ちをおさえ、やつとのことで返歌を書きました。

『かひはかくありけるものをわびはてて死ぬる命をすくひやはせぬ（訳*ごめんよマイハニー。けど君から歌をもらえるなんて少しは甲斐があつたみたいだよ。）』

そつ書き終わった途端に石上の中納言は息絶えてしましました。本望なのか何なのか、ちょっと氣の毒な気もします。

かぐや姫もこの件については少し氣の毒に思つたみたいです。

カグヤ姫ノ人間性ガ1上ガッタ！！

おつとなんでしじうね、このどつかのクエストみたいなレベルアッ
プは。

兎にも角にもここからまた「甲斐」についての言葉が生まれました。
少しだけ嬉しいことを「甲斐があつた」と言つようになつたそうで
す。皮肉ですねー。

「人ならいけるか…？帝さま…。（一）

さてさて、話は変わりまして、かぐや姫の器量がこの世に類を見ないほど美しいことを帝がお聞きあそばされました。何故、この性格の悪さが伝わらないのか疑問に思いますが、それはこの辺に置いておいてつと。

帝があつしゃるには

「沢山の人の身を滅ぼしてまで結婚や契りを結ばないといつかぐや姫は一体どんな人なのか磨きになつて仕方ないおじや。内侍の中臣の房子や、見届けてまいれ。」

だそうです。見届けてくるも何も、「沢山の人の身を滅ぼして」なんて言つといて悪女だと氣付かないんでしょうか？帝は危険なかぐや姫わーるどに足を踏み入れようとしている状態です。今なら思いとどまるれるものを、その姿見たさに使いのものを出してしまいました。

さて、使いに出された房子さん。かぐや姫宅に着くと、お爺さんとお婆さんが驚いた様子で迎えてくれました。帝からの使いですから驚くのも当然でしょう。というより、この爺さんと婆さんは日本一の権力者にかぐや姫を嫁がせれば莫大な富が なんていう勘定をして驚いているんでしょうが。

そんな一人のリアクションに特別感情を抱くことも無く、房子さんは此処へ来たわけを説明し始めました。さすがエリート、いちいちツツコミを入れるようなキャラではないということですね。

「帝様ですね、『かぐや姫の容貌が優れているようなので見て参れ』と仰せられるので、お宅にお伺いさせていただきました。」

「ならばそのようにいたしましょうか。」

房子さんの言葉を聞き、今まで全然目立たなかつたお婆さんが、かぐや姫のところへ言付けに行きました。

かぐや姫はいつも通り、ポテチをかじりながらテレビを見ていました。口の周りには食べかす、手は油だらけ……。いや、絨毯で手を拭くんじやない！

「ちょっと、かぐや姫や……」

「あつ、ばばあ久しぶりー。何か用？」

「来客ですよ、来客。貴女に会いたいという人が来てるんです。さあさ、ちゃんと支度をしなさい。」

「それあれでしょー？ほら、杓文字持つて歩つてー、人の家の晩ご飯見てくおつさんでしょ？えーと、確か……隣の晩」

「ちがーうー帝からの使いの者です。早くお会いしなさい。一攫千金のチャンスかもしれないんですよ！」

さすが似たもの夫婦。お金になる話には目がありません。

かぐや姫は内心呆れていました。ストーカー、もとい五人の貴公子たちは誰一人としてかぐや姫の欲しいものを持つてくることが出来なかつたですし、どれも大した男じやありませんでした。どうせ帝もその手の者だろうと思つていたのです。まあ、あんな無理難題を遂げられた方が凄いというのが一般論ですが、かぐや姫にはそのように考える思考が欠落していたのです。箱入りに育てすぎてしまつたようですね。

しかし相手は帝（の使い）。わざとお婆さんも簡単には引いてくれないでしうから、何か良い言い訳は無いかと思案した挙句、かぐや姫はさりげなく「ふう」と溜息を漏らしました。

「私さー、そんな可愛くもないし綺麗じやないでしょー？鏡に聞いたわけでもないしー。それなのにそんな期待されてさー、その期待裏切るよつなら申し訳ないもんねー。だから会ーわない！」

おやおや、セリフに異国の御伽話の例えが入っています。ここは日本です。しかも昔の日本です。グリム兄弟など存在しません。無視しましょう。

お婆さんはその言葉を聞いて困ってしまいました。けれども此処で引くわけにはいきません。何て言つたって、相手は帝なのですから。その命令に背くわけにはゆかないのです。

「やう言つてもですね、一攫千金のチャンスを逃すわけにはいかないんですよ。あと、帝の使いの者を疎かには出来ません。」

あれ？ 帝後回し……？

そんなお婆さんの言い分にかぐや姫は呆れ果て

「はあ？ 別に帝が側に置いてくれるつて言つてもー、嬉しいとか畏れ多いとか思わないしー。」

と冷たく言い放ちました。その態度があまりに冷たいので、お婆さんは氣後れしてそれ以上強く出ることが出来ませんでした。

「てな訳で、あの親不孝者は思考回路が幼稚な上に強情なので、

貴女様にお会いしてやりたいことがあります。」

と、お婆さんは房子さんに事情を説明しました。やつぱりお婆さんの頭の中には富と権力のことをしかないようですが。でなければ、わざわざ親不孝者とか言いません。

ここで房子さんの思考が高速回転し始めました。

かぐや姫の顔が見れない 任務失敗 帝に怒られる 同僚の笑いもの……

「わ、私はですね、かぐや姫の容貌を確認して来いと言われてこんな辺鄙な土地までわざわざ来てるんですよ！？それを何もしないで帝様のところに帰らうものなら、怒られます！同僚からも笑いものにされ、私の地位や名誉も失われ、プライドもズタズタになります！こうなつたら慰謝料どころの話じやなくなりますよ！？何としても連れて来てください！」

頭の良さやうな言い回しをしていますが、どちらかと言つと私情を中心です。とにかく要約しますと、「何としても任務を成功させたいので連れて来い」と言つたところでしょうか？エリートさんは、自分の身の保身のためなら強く出られるのだから怖いものです。

お婆さんは、仕方なくもう一度かぐや姫を説得に行きましたが

「そんなお偉い帝様のー、命令にー逆らつて言つたなんつー、早いとこ私を殺しちゃえばあ？」

なんて言つものですから、なす術がありませんでした。

「人ならいけるか…？帝さま…。（一）

結局、房子さんは何の成果も上げられぬまま帰路につく事になりました。その顔は蒼白で、上の空で「プライドが、地位が…」とかぼやいています。

そして、帝にこの事をそのままお話しました。賢明な判断です、房子さんは何も悪くないのですから。帝もそれが分かったのか頷くと、

「やうか…それが多くの人を殺してのけた心というものおじやか。房子よ、」苦労でおじや。「

と聞いて、この話はそれっきりになりました。

さすが帝様、天に等しいと言われた帝様が檻櫻屋の成り上がりの姫様にこだわることもないと呟つことなのでしょうか？まことに賢い判断でござります。

が、帝もやはり人の子でした。

帝と言えばその命令には誰も逆らわず、

「 して参れ。」

と何か命令すれば、姫は

「 ははあ～。」

と従いますよね？ですからこの帝にとって自分の命令に逆らう者など初めてなわけでござりますて、「絶対負けねえ」と闘争心に火が点いてしまつたのでござります。

帝は作戦を練りました。そして「かぐや姫を陥落するこゑます。周りからー」といつ結論に至り、早速お爺さんを呼び出しました。

「さてこの間、麿はそちの家に居るかぐや姫なる者の顔が見たいと使者を派遣したが、その甲斐もなく終わってしまったおじや。普通ならあるまじき行為、ここのままにはしておけなこでおじやるー。」

語尾を気にせず、お爺さんがかしこまつて返事とこづかの言ひ訳を申し上げる」とこままで

「ここの愚か者の親不孝者の娘は富仕えなどしそうにあります。我々も手を焼いているので」やれこめす。やつ申してないと今から言付けて参りますおじや。」

あ、語尾移つた。

これを聞いて、帝は首を傾げます。「何故、麿の語尾を……」ではな

く、

「わが達の娘であるわい、何故思に通りにならないのじや？」

お爺さんは口を噤みました。

帝はお爺さんがかぐや姫を庇つて居ると思ったのか、こやにやしながらある条件を持ち出しました。

「もしかがぐや姫とやらを献上させぬことが出来たのなれば、麿の力でそなたに爵位を貰えても良こおじやよ?」

爵位を貰ふと云つ」とは、貴族の仲間入りだといつ」とです。いくら大富豪になつたお爺さんでも、この先あと何年この生活がせぐ

か続くか保障されているわけではありません。爵位を貰えるとなれば、竹取生活ともおさらば。今以上の贅沢三昧が出来ることでしょう。こんな美味しい話にお爺さんが食いつかない筈がありません。今まで貴公子たちのように一時限りの贅沢品では到底得られないような地位なのですから。

お爺さんは諸手を上げて大喜びで家に帰つて行きました。

「おのれの娘がお嬢さんにならうか…？帝わかも…。」（II）

お嬢さんは家に帰るなり、早速お嬢さんに事情を説明しました。

「お嬢さんや、実はな。いや、耳を貸してくれ……（「いやいや」）」

「うそつこ……やへー…。うそ、ぐせつ…。」

「ちよ、じじい…。わざわざうつこつよー。」

仲睦まじく内緒話をする2人の間にかぐや姫が無理矢理割り込んできました。お嬢さんは、つつ伏せに床に倒れこみ、お嬢さんは腰を抜かしてしまいます。

「か…かぐや姫や、こつから其処に。」

「最初から居たつづーのー最初からーー内緒話とかちょーウザいんですけどー。しかも丸聞こえだしー。じじいは爵位欲しざに私を帝に売るんだー。」

この言葉にお嬢さんは何も返せませんでした。言い方が悪いですが、お嬢さんがしようとしているのはまさにそういうことなのです。しかし口籠つたのも一瞬のこと。直ぐに「いや、儂らの夢の生活が」と、小声で「こじよ」と言いつめました。

「富仕えとかー、私向いてないしー。そんなのしたくないんだよねー。でも確かにじじい達には世話になつてゐー」

「じゃ、じゃあー」

「でもー、だつたら私、じじーたちに爵位が手に入つたらその後は死ぬからねえ？」

一瞬淡い期待を抱いてしまつたお爺さんですが、再びかぐや姫が自分たちを突き放すようなことを言うので酷くがっかりしました。でも良く考えてみてください。お爺さん達は金銭目的でありますが、かぐや姫に幸せになつて欲しいだけなのです。けれども、かぐや姫はそんな事を望んでいません。かぐや姫の為を思うならその意見を尊重し……つてそれが出来れば苦労はしない、やつぱり金銭目的中心ですね。どうやらこの場は良い話で丸く済める事は不可能なようです。

しかもお爺さんは、かぐや姫の「富仕えするなら死ぬ」つていうのは嘘だと思っているようです。ですから、もつ少し説得すればかぐや姫も折れてくれると思つていました。

「爵位が手に入つたからと言つて、我が子と会えなくなるのは儂として辛いのじゃ。それに何も死ぬことはなかろつに。何が嫌なのじゃ?どうして儂達の事をもつと考えてくれないのじゃー。」

最後の一言がいつも余計です。これさえなければいいこと思いますが、そこがお爺さんの短所でもあり長所でもあるのです。良く言えば自分に正直、悪く言えば自分の欲に正直。

プリン

「もしかしてさあー、じじいは私が死ぬつて言つてゐるの嘘だとか思つてゐるでしょー?」

音を立て、ついにかぐや姫がキレました。いつなると誰も手がつけられません。暴走モード突入です。

「ええよ、ええよー。だつたらー、わてを富仕えさせてー、死なないかどうか試せば良いだけの話じやろがい！わてはなー、色んな人の思いを無駄にして此処に居るんじやい。それなのに、相手が帝だからと言つて2つ返事で受け入れたら人聞きが恥ずかしいじやろがい。分かつてんのかあ？」「ラアアー！」

もう一人称とか喋り方とか色々変わっています。いつもギャル語を話している人が急にこんな喋り方を始めたら誰だつて驚きますし、怖くなります。

お爺さんもそうなつたよう

「」「これでは逆らわない方が良をやつじや。帝にかぐや姫の意向を伝えてこよひや……」

と行つて、逃げるよに帝のといひへ向かいました。

「人ならこなるか…？帝れも…。（四）

「まあ、ところがで『富仕えしたら死ぬ』なんて言つものですから、お仕えする事もできませんでした。申訳」されこませる。」

かぐや姫から逃げるよつて帝のところへ参上したお爺さんは、先程の出来事を帝に話しながら、あのズスの効いたかぐや姫の声を思い出し、たいそう顔色が悪くなつておつました。

「実はですね……あれば実の私の子ではござりませんでしたな。竹の子なんですじや。いえ、土から出でたのではなく竹を切つたらあれが出てきました。ですからきっと氣性も普通の人ではないんでしょうね……恐れしや」

「成る程、でおじや。ところでおちの家は山の麓に近くやうでおじやるな。狩りに行くフリをしてかぐや姫を見るとこいつのはどうですかな？」

お爺さんの話に適当に相槌を打ち、狩りに行くフリをしてまでもかぐや姫に会いたいなんて余程かぐや姫のことが見たくてしそうがいいんでしそう。それと「おじや」の使い方が何か変です。無理矢理の気がします。

「まあ、ほーっとしている所へ不意を突いて行けば見れるかもしだせんよっ。」

*

なんて事をお爺さんが言つたものですから、後日帝は突然

「麿は狩りに行きたいおじや！ とか今すぐ行くおじや！」

てな感じで我儘を言い出し、そう言つたにも関わらず狩りそっちのけで、かぐや姫の家にすかずかと入つていきました。今までの貴公子たちの中にはストーカー行為をやつてから不法侵入なんて人も居ましたが、何の前触れもなくすかずかと家に入る人は帝が初めてです。この傲慢さといい、家来を振り回す我儘さといい、かぐや姫といい勝負かもしません。

一步家に入ると、家の中は光で満ちていました。この光とはかぐや姫が放つている美のオーラです。え？ 家の中の至る所に照明が？ そんな馬鹿な。

更に奥へ進むと、素晴らしい美しい姿で座つている人が見えました。手には何か持つています。

「この人がかぐや姫で間違いないでおじやな？」

と、その時かぐや姫と田^由が合つてしましました。

「何かキモイのが家の中に居るしーー。じじいとか誰か居ないのーー？ 生理的にこいつこいつ顔の人嫌なんですかビーーー！」

目が合うなりかぐや姫は言いたい事を言いたい放題叫び、違う部屋へと隠れようとしました。

しかし帝も此処まで来たならもつと良かくかぐや姫を見たい、あわよくば連れて帰りたいと思い、その袖を掴みました。

「ま、待つでおじや！」

「ひこーーー！触られたーー！マジキモーー、おじやとかキモイしーー！
てか私のおやつのゼリー落としちゃったじゃなによー。ウザセマ
Xみたいなーーー！」

かぐや姫は本当に帝のことが嫌いなようです。それと手に持つていたのは、おやつのゼリーだったみたいですね。色気より食気ですね。一方帝はと言うと、かぐや姫の美しさを大層気に入ってしまいまし。美しさが気に入ったのか、或いは性格が似ているので気に入ったのかは定かではありませんが、とにかく気に入ってしまったのです。

その袖を掴んで決して放そつとはしませんでした。

「放さないでおじやよー（ニヤニヤ）」

その時の帝の顔といつたら大変はしたなく、とてもゴールデンタイムに放送できるような顔ではありませんでした。まるで時代劇に出てくる悪代官のような顔で、仮に放送するなら眉メロの時間帯か、深夜帯です。どんなに酷い顔なのかはご想像にお任せします。

そんな酷い顔の帝にかぐや姫が耐えられるはずもなく、喚き散らしています。

「放せ、放せつづーのー！この誰だか知らないけれど、私とアンタ
じや生まれた所が違うのー！てか根本的に何もかも違うしー！こんな薄
汚いボロボロの雑巾みたいな奴と一緒に出身とか思いたくもないし
！最低ー！マジ最低ー！放せーーー！」

ボロボロの雑巾みたいな奴 よつぱど酷いのでしょうか。

普通帝にこんな事を言えば死の宣告は免れませんが、帝は莫迦……
ではなくて、心が広いお方なので敢えて聞き流しました。

「嗚呼、良いでおじやるよ。もつと磨を罵つても良いで〇JARU
YO」

て、こんな言葉は真に受けたるしーそして喜んでいます。帝様
はそういう趣味のお方なんでしょうか?深入りするともつと嫌なも
のを見そなのでこの辺にしておきましょう。

罵られながら、そして足蹴にされながらも帝は〇の外見だけは(一
そつ、外見だけは)美しい姫君を連れて帰ろつと、待機していた家
来に命じ、御輿を持つてさせましたが、その途端かぐや姫はする
りと帝の手から逃れ、影だけのものになってしましました。
此処でよみがへ帝は氣付きます。

「誰かが言つていたおじや、かぐや姫は土から生えた竹の子だと。
成る程、普通の人ではないでおじやな。」

誰かつて、それを話した相手はお爺さんです。しかも色々と間違つ
て覚えていてます。話を中途半端に聞いていると思い込みで恥を搔く
良い例ですが、天下の帝様には誰も逆らいませんし突っ込みません。
そう、帝と対等に張り合えるのはこの人だけなのです。

「誰が竹の子だつてのーー」

ほらね。かぐや姫は元の姿に戻り、帝をグーで思いつきり殴りました。

後日、帝はお爺さんに官職を与えたそうです。
別に与えなくても良いのではないかと思うのですが、帝は大層機嫌
が良く、かぐや姫に殴られて出来た痣を嬉しそうに撫でていたそ
うです。

「人ならじけるか…？帝わも…。（五）

「つゝ、つゝに夢にまで見た官職が…！」

お爺さんは官職を与えてもらつたことに對し、諸手を挙げて喜びました。どうせお金のことを考へてゐるに違ひありません。

お爺さんは此處で帝に自分の財力を見せ付ける為に、盛大な宴会を開きました。お爺さん一家に仕えてる人などを呼び集め、皆にじり馳走を振舞つたそうです。

まあ、この財力といつのはかぐや姫のおかげで出来たようなものです。この時点でかぐや姫は結構な親孝行をしてると思います。態度は些か悪い氣もいたしますが、お爺さんとお婆さんが大好きなお金を与えているのですから問題は無いでしょ。

しかし、人間というのは強欲な生き物。お金が手に入ると今までの生活を忘れ、更なる富を築きたがるのです。お爺さんとお婆さんは、その典型的な例でした。

そんな宴会もお開きになる時間が来ました。

帝はかぐや姫をその場に残して帰るのを心残りに思い、まるで魂をその場に残したようにお帰りになりました。

そして御輿に乗つた後に、かぐや姫にこんな歌を贈りました。

『帰るさの行幸もの憂く思ほえてそむきてとまるかぐや姫ゆゑ（訳＊帰るのも足を止めて振り返つてしまつでおじやよ。グーで殴られたあの感触、嗚呼、忘れられないでおじや。）』

それに対し、かぐや姫も返歌しました。

『律はふ下にも年は経ぬる身のなにかは玉のつてなをも見む（訳＊

「こんな蔓草が絡んでるよつたな家に来なくとも結構です！てか来んなー。」
『

今回は訳が大分間違っていますね。正しい訳は自分で調べましょう。ともかく、帝はこの歌を見て、余計に帰りたくなくなってしまったのです。此処に居たいとも思いましたが、かぐや姫宅の敷地からは出てしまったし、こんな所で一晩過ごすのはさすがにキツイので仕方なくお帰りになりました。

帝は帰つてから、宮中に居る女官達の顔を良く見て回りました。

「あの者に比べると大したやつが居ないでおじや。」

「んまあー、失礼しけやつわーー！」

つまり、かぐや姫と女官達の顔を比較して回つたわけです。

普段懸命にお仕えしている女官達から見れば、帝のやつていることは最低ですし、屈辱的でもあります。大した奴が居ないなんて言われば、女性なら誰だって怒ります。其処のところの空気が読めないのが帝様。思つたことがすぐに出でしまうようです。

何はともあれ、帝はかぐや姫がどれだけ素晴らしい女性かを再認識し、物思いにふけるようになつていつたのです。

まあ、ポテチの油を絨毯で落とすような奴、普通なら願い下げですけど、かぐや姫のそんなはしたなく、だらしない部分を知らない帝はかぐや姫が相当好きになつてしまつたようです。

嗚呼、あの叩かれた時の感触、思い出しただけでも良いでおじやるなあ。

……なんか違いますね。

叩いてくれる人なら誰でも良かつたような気がします。それが偶々、かぐや姫といつこの世のものではないような美しさを持った女性だつたわけです。実際、この世のものではなく竹の（以下略）。

それから帝は夜を一人で過ごすようになりました。

よつぽどの事情がない限り、后たちの部屋にも行かなくなりました。「后が居たんかいっ！」と、ツツ「ミミを入れたくなりますが、物思いにふける姿を見ると何だか可哀想になつてきます。

おや？ 何か書いてますね。

『かぐや姫へ。元気にしているでおじやか？ 麗はとつても元気でおじや。』

何ともまあ、ありきたりな書き出しの手紙を書いています。宛先はかぐや姫へです。しかも、喋った時の語尾がそのまま文面に出ています。教育係は何を教えてたんでしょ？

これを受け取ったかぐや姫はと言つと、一応返事は書いていたようです。

けれど、その内容といつのは「つやこ」とか「キモい」とか帝を罵るようなとつても失礼且つ不愉快な言葉ばかりでした。

しかし、寛大な（？）帝様はこんな言葉を喜々とした表情で受け入れ、四季折々の和歌など添えて性懲りもなく、かぐや姫に手紙を出しました。

いや～、物好きも居るもんなんですねえ。

『もう一度磨の類を思つておひつじのや。あの感触、病み付くなりやつだおじや。』

「ハヤヒ、マジウザイー。」

こんな風にして、かぐや姫が帝を手紙で罵り…もとて手紙でお互いが心の慰み合ひをしてくる内に、あつとこゝう間に3年が経つてしましました。

かぐや姫の成長は止まつたようだ、3年経つたからと直つて決してお婆さんみたくはなつていません。美しくまま、その姿を留めてあります。全く都合が良いですね。

そんなある春の始めの夜、月が美しく空に輝いているのを見て、かぐや姫は物思いにふけるようなりました。

お爺さんが、月を見て団子を連想してそれが食べたいのかと、お婆さんに団子を作らせてみましたが、どうやら違うようでした。

それどころか

「じじいったら普段どうこつて私を見てんの？浪漫の欠片も無い
じゃんー色氣よつ食氣ー。？」

なんて言われてしまい、どうすることも出来ませんでした。
まあ、普段は色氣より食氣のかぐや姫なのでお爺さん達にやつ思われても仕方が無いのです。

こんなお爺さん達ではなく、御付きの者が「月の顔を見るなんて不吉な事ですよ。」と、止めましたが、隠れてこつそり月を見ては、涙を流すよつになりました。

あの、天下御免のかぐや姫が涙を流してこるのです。ただ事ではありません。

時は流れ、その年七月十五日。

その日は一度満月でした。その日もまた、かぐや姫は縁側に座り月を見て、物思いにふけっていました。

御付の者達はそんな様子を見て、お爺さんに

「かぐや姫は最近になって普段より月を良く見て、物思いでふけっています」といふのです。

と言いました。

お爺さんの考えは氣楽なもので

「あの丸い月を見て、丸顔ぱつちやつの帝様でも思て出したりおるんじやろ。やはりお年頃かのう、はつぱつはつ」

なんて言っています。

しかもサラリと帝の事を「丸顔ぱつちやつ」なんて言っています。あれだけ恩を受けとてなんていふことじよう。

御付の者はお爺さんの頓珍漢な発想に溜息をつきながら、今度はこの頭がお皿出度いお爺さんにも分かりやすく言つてやる」としました。

「あのですね、私が言いたいのはそういうことではなくて。何やら大層思い悩んでいる事があるようですかから、気をつけてあげて下さってことなんです。わ・か・り・ま・し・た・か・!?

「あ、ああ。そういうことじやつたんかいな。」

びつやうね爺をひこね御付の者の言葉をようやく理解したようですが、凄まないと分からんなんて、普段人の話をまともに聞いていないからそつなるのです。

そつ言わされたのでお爺さんは一応、かぐや姫に直接憂いの理由を聞いてみることにしました。

「これ、かぐや姫よ。何をそんなに円を見て憂いておるのぢや？儂が官職に就いたりと色々と満ち足りておる生活なのに何がそんなに不満なんぢや？」

「金錢的に満ち足りて満足なのはじじに達だけでしょー？やうこつ のウザインですけどー。」

確かに、贅沢三昧が出来て嬉しがつておるのはお爺さん達だけです。そもそもかぐや姫は、帝に求愛されようと、どれだけの富を築こうと、そんなものには興味がないのです。でも、ずっと貧乏暮らしにならなければそれで文句を言つていたと思いますが。

「……円を見ると世の中が夢く感じられるんだよねー。円の満ち欠けに合わせ時は移ろつてくしー。まあ、嘆いてなんていないけどさー。」

そつ言つとかぐや姫は自分の部屋に下がつてしましました。いつもは食べ物の事ばかり言つておるかぐや姫が、らしくもないことを言つでお爺を心配になつて、部屋に居るかぐや姫の所に行きました。

かぐや姫は自分の部屋でもせまい物思にてふけつてこゐよつでし

た。

「ほれ、やつぱり何か悩んでいるようではないか。あれか? 今の暮らしが不満なのか? もつと金や富が欲しいとか……」

「やつひつてんのはじじに達だけつて何處なわせんの? マジハザ二
し~!」

かぐや姫の口の悪さはこつもと変わつませんが、どいか言葉に力が無く、弱々しい感じでした。

金のじとしか考えていないお爺さんも、たすがにそれにほん付いたよつで、やつぱり何か悩み事でもあるんだらつから言つてみると詰め寄りましたが、かぐや姫は首を横に振りました。

「別に何も思つてないつてばー。ただ何となく心細く感じるだけだつづーの。」

「それはきっと円を見るからじや。お前が居る限りあの円のようになんじやなくてさ。第一、月見ないで過」せなんて無理だつづーの。 儂のためにも。」

「だーかーらー、思いつきり私欲じやーん。」の業突じじい。 そんなじやなくしてさ。 第一、月見ないで過」せなんて無理だつづーの。

「

そう言つとかぐや姫は、部屋から出てまた縁側に座り円を眺め始めました。

お爺さんは、ちょっとお金を強調し過ぎていじけたのかと、今更ながら反省しましたが、かぐや姫はお爺さんの言葉なんか気にも留めていませんでした。 ただ、月を見ていると心細くなり、けれども円

を見ない」とも出来ないなんていう複雑な心境なのです。

月が出でていな時は、物思いにふける様子は無いのですが、月が出ると物思いにふけり、溜息をついたり、涙を流したりしています。かぐや姫が涙を流したり溜息吐いたりと、この異常事態に侍女達は

「やつぱり何か思い悩んでいる事があるんだわ。」

「やつよ、きつと思い悩んでいる事が……って私の煎餅取らないで
よ。」

「隙がある人が悪いんですね。（バリバリバリバリ……）……って辛
ッ！！」

「残念でしたー。私は辛いの好きなんで激辛煎餅なんですよー。
で、何の話だっけ？」

と心配していましたが、この人たちも、もちろんお爺さんとお婆さ
んも、かぐや姫の悩みが一体何なのか分からぬままでした。

八月十五日近く、こつものよつにかぐや姫は縁側に座り月を眺めていました。けれどその様子は、いつにも増して酷いものでした。何が酷いかつて?もう人目も気にせず大声を上げ泣いている事です。声は近所迷惑になるくらいの音量ですし、涙でメイクがとれかかっています。涙と一緒に付け睫毛が流れる光景なんて滅多に見られないでしょ?。

こんな姿を見て、やはりただ事ではないなと、お爺さんとお婆さんはもう一度泣いている理由を尋ねて見ました。すると、かぐや姫は此方が泣きたくなるような答えを返してきたのです。

「前にもー、言おつと思つてたんだけどー言つちやうとじじい達が動搖するかなーと思つて言えなかつたんだよねー。てか、じじい達のせいで言つタイミング逃してたつて言つかー。でもーこのまま言わすには過げせないっぽいしー。」

「じゃから、泣いてこる理由は何なのじや?」

「ぶっちゃけー、私つて人間じゃなくて月の都の人なわけー。色々あつてー此処に来たんだけどーそろそろ帰んなきやなー。迎えも来るっぽいしー。それが今月の十五日なわけ。時間無いじやん?あと何日か後じやん?それまでの間ーじじい達の暗い顔見てるのも嫌だつたからそー、春頃から悩んでたわけー。それって避けられない事だしー。」

“うやうやしく姫はかぐや姫なりに、お爺さんとお婆さんと氣を遣

つて本当のことが言い出せなかつたようです。

いつもギャル語を使い、態度はでかく、2人のことを下僕のよう扱つていたかぐや姫ですが、実はお爺さんとお婆さんのこと親のように思つていたらしく自分も辛いようです。

性格がひん曲がつている様に見えますが、根は良い子なのです。

お爺さんはとつうと、この言葉を聞いて大層衝撃を受けました。

「何イイイー！竹の中から貴女を見つけ、育て始めてから何年も経ちましたが、貴女に会つたその日から大判小判がざつぐざく。そんな金の生る木……いや、幸運の女神のような貴女を迎えて来るなんて一体何処のどいつじゃーけしからん、誠にけしからん！儂の安定した老後の生活を奪いにくるとは、ふえつー！」

かぐや姫との別れより、お金と別れなければいけないことを悲しんでいるようなお爺さんの鳩尾に、かぐや姫の鋭い肘鉄がクリティカルヒットしました。

「じじい、金のことしか頭に無いのかよーもーやだよー、私だつてじじい達の事心配して中々言い出せなかつたのに。えーんえーん（棒読み）」

2人とも大声で泣くわ叫ぶわ、どうしようもない状況です。え？かぐや姫の声が棒読み？いやいや、そんなことあるわけないじゃないですか。本当ダヨ？

「私さー、月の都に本当の両親が居るのー。僅かな間だからとか言われてこつちに來たけど、何か騙してたっぽくて、こんなに時間が経つちゃつたわけ。そんな酷い本当の両親忘れてー、じじいとばばあのこと本当の親みたいに思つてた。月に帰れるとか言つても悲しいだけで全然嬉しくないんだよねー。」

月の都の人といえど、かぐや姫は、お爺さんと、いつの間にかいたお婆さんと抱き合い、酷く泣いてしました。

この屋敷に仕えている人たちも、かぐや姫が居なくなると思つと寂しくなり、湯水も喉を通らず、お爺さんとお婆さんと同じくらい悲しい気持ちになりました。

「なんかさあ、かぐや姫が月の都へ帰るひじよ？（ボリボリボリボリ）」

「マジで！？あいつ宇宙人だったの？（パリパリパリ）」

「あいつ呼ばわりなんて無禮ですよ？（ゴクゴクゴク）」

「あー、ポテチうめえ。オレンジジューース最高ー。」

……あれ？

「」のよつな事を帝が聞いて、「なんとこい」とおじや一齋のかぐや姫が！なんて言つたかどつか定かではありますんが、かぐや姫宅に帝からの使者がきました。

「一体何があつたんですか！？」

「儂の、儂のかぐや姫があーーー……」

使者は、お爺さんに詳しい話を聞いつけましたが、泣き止まず、話にならません。

泣いて、喚いて、嘆いて、腰は曲がり、髪は白くなり、目もただれ、とても今年50歳を迎える人には見えません。

……ん？ちょっと待つてください。確か、お爺さんはかぐや姫に言い寄る五人の貴公子たちの件の時に「儂はもう70歳を越えた。とつくに定年してゐ歳だし、竹取るのもきついし。」なんて言つてましたよね？

実は70ではなかつたんです。全然定年してゐるよつな歳では無い筈です。そう、あれはかぐや姫を嫁に出すの為の嘘だつたのです。「私はこんなに年取つてゐんだから早く嫁に行け」と急かす為のものだつたんですね。早いとこ王の輿にさせたかつただけでしうが。

「はあ、いきなり自分の娘が居なくなるなんてわざお辛いでしょうね。」

そんな事は露知らず。使者は、やつとお爺さんの肩をポンと叩きました。

「かぐや姫を帰したくはないでしょ？」「

「は、はい。かぐや姫は……ぐすり、今月の十五日で月から迎えが来るとか申しておつます。儂がかぐや姫を失うと悲しいように、帝様もきっと悲しいおはすですじや。ですから、その日に会わせてかぐや姫の身辺に警護をつけて欲しいのじや。そして月の都の者とやらをとつつかまえるのじや！」「

何だかお爺さん、急に元気になつてしましました。

帝の力を借りて、かぐや姫を用へは帰さない向とかじょりと意気込んでいります。

一方、これに対する帝様のお返事はと詰りと……

「あの拳、でへでへ……／＼＼＼＼おほん、ではなくて一田惚れした磨でさえ帰したくないでおじや。なににお爺さんはどんなに辛い思いをしてるでおじやか、想像もつかないでおじやよ。ええい、者ども出合えい！至急かぐや姫宅の警護に当たるのじや！今すぐおじや！」「

「帝様、大変申し上げにへこのですが　十五日まではあと何日かありますよ？」「

こんな具合で、当田帝はかぐや姫宅に沢山の兵を派遣しました。

中将鷹野のおおくにと言つ人を筆頭に、約2千人もの人が警備に当りました。当然、この人たちの給金は、民から巻き上げた年貢で出るのですから、たかが女一人のためにこれだけの兵を動かしたと民が聞けば、帝といえどもただではすまないでしょ。

でも、そんな事なんてこれっぽっちも考へない帝様（むしろ袋叩きになつても喜ぶかもしれません）は、ちやつちやと兵の配置を決め

ました。

まず家の周りに千人、屋根の上に千人……誰でも考え付くような配置ですね。

しかし、ここで良く考えてみてください。「千人乗つてもだいじょうぶ！」なんていう家なのですから、その壮大さが良く分かるでしょう。とにかく、すつっつっつっごい屋敷なんです。

家の中の警護はと言うと、元々使用人の数も多かつたので、その人たちを隙間無く敷き詰め、警護に当たらせました。当然のことながら警護の者は皆武器を持っています。

かぐや姫^モは、城砦と化し、これから一戦交えるかのような雰囲気です。

さて、肝心のかぐや姫は何処にいるかと言いますと、お婆さんに抱きかかえられ、周囲を厚い壁で囲われた部屋にあります。戸には当然の如く、錠前がおろしてあります。その前に控えるのはお爺さん……つて、最後の守りがお爺さんなのは、ちょっと危ない気もしますが、お爺さんの言う事には、

「かつかつか。これほどの守り、天人にもまける気がせぬわー！」

だそうです。

更にお爺さんは、屋根の上に居る人たちにも一聲掛けました。

「おーい、ちょっと聞いてくれんかー。何か少しでも空を横切るものがあれば構わず射殺してくれーい！」

「はーい、分かりましたー！蝙蝠一匹だつて見逃しませんよ？もし蝙蝠が来たら射殺して、見せしめにその辺に吊るしておこうと思います。」

鳥や、蝙蝠たちにとっては迷惑な話です。

かぐや姫のせいで、人間界だけではなく、動物界にも害が出ようと
しています。

まあ、こんな厳重な警護になつたのは、お爺さんの計らいなので、
一概にかぐや姫が悪いとは言えませんけどね。

動物達の事なんて、これっぽっちも考えず、お爺さんは「これは
頼もしい」と頷いていました。

帝の派遣した兵や、自分のお付の者達が慌しく警護に当たり、お爺さんが「これは頼もしい」なんて頷いている様子を見て、かぐや姫は深く溜息をつきました。

「私を、こんな所に閉じ込めて一戦う準備したつてー、マジ無意味だしー。矢とか絶対当たんないし。錠なんてあの人たちの前だと何でもないしー。今みたいに勇敢な気持ち持つ人も居ないと思うんだけどなー。」

自分の事で周りが一生懸命なつているところに、かぐや姫の言ひ方はまるで他人事のようです。

これを聞いて、お爺さんが言ひ事には

「儂の金の生る木を…じゃなくて、儂の大事な娘を連れ去るうんていう不届き者は、この儂の長い爪で天から引きずり下ろしや、どうせなら田玉を抉り、髪を引っ張り引きずり下ろし、そいつの尻を引っ張り出して、皆の前に晒して恥を搔かせてやるー。」

と、大層^じ立腹な様子です。

でも、よく考えると言つてゐることが可笑しいです。『立腹の様子は最初の言葉で十分に伝わるので、そこで止めておけばいいものを、後半は実に子供っぽいことを言つています。

それを見たかぐや姫は、顔を真つ赤にして

「は、恥ずかしい事言つなよ！外に丸聞こえだつづーの。マジみつともないし。まあ、でもそれだけ私のこと大切してくれたのに、どうしても別れるなんてぶつちやけ私も辛いんだよねー。」

「ならぬ、行かせぬぞ！儂の命に変えてもお前を守つてやる。」

「気持ちは嬉しいんだけどねー。いやあ、実はや、じじいたちに何も恩返し出来て無いじゃん？そんな状態で月に帰るの私も心苦しいしー、だから縁側に出てもう一年だけでもこっちに居られるように、お星様というお月様にお願いしたんだけど、あいつら物分り悪くて頭カツチーンカツチーンだしー。月の都の人つて、見かけ綺麗で老いる事もないんだよねー。羨ましいって思うでしょ？とんでもない、あいつら感情無いわけ。そんな奴らのところに私も帰りたくないしねー。老後の面倒みてやりたいとこなんだけどさ。」

まあ、見かけは綺麗で中が何とかだつてこいつのはかぐや姫を見ていれば想像ができます。

けれど、そんな中でもこちうらに居る事で感情が芽生えたみたいです。悪びれていますが、本当は優しいのかもしれません。これを聞いてお爺さんは、

「寂しい事を言つんじやない。どんな人が来ようと儂が守るんじやー！」

と、天の使者を忌々しいと思つてゐるようです。

くだらない事をしているうちに、宵も過ぎて、午前零時を知らせる鐘が鳴りました。え？ 硝子の靴？ それはまた別の話です。

と、その時！

家の周りが急に昏闇以上の明るさになりました。人の毛穴まで見えるほどです。想像しただけでどれほど気持ち悪いか……いえ、どれほど明るさかお分かりいただけるでしょう。

そして、空から雲に乗った人が降りてきました。その人たちは、地上から2mくらいの高さのところに整列しました。

「番号」！

一
い
ち
！

十一

「やんしゃんじやくはなせわせめ、う……」

「こら、一人で言うのではない。」

こんな馬鹿なやりとりをしながらも皆真顔です。かぐや姫が以前「あいつら頭固いし、感情なーい」と言っていたのが頷ける光景です。これだけ美男美女が居ると言うのに、笑うことも無く、怒る事も無く、皆張り付いたような真顔の表情なのです。まるで仮面を被つているかのようでした。

この様子を見て、警護に当たっていた人は皆、物の怪に襲われた
ような気持ちがして、戦う気力をなくしてしまいました。殆んどの

人が手や足に力が入らなくなり、ぐつたりとしてしまい、とても武器を持つて戦おうなんていう雰囲気ではなくなってしました。かぐや姫が言っていたのは「こうこう」とだったのですね。

さて、人を見下すかのように空中に立つている人たちは、とても素晴らしい衣装を纏っていました。この世の人とは思えません……あ、この世の人ではありませんね、何て言つても月の都の人ですから。

その人たちは空飛ぶ車も伴つていました。円形の傘が付いているとか、色々と説明が面倒なので、ここでは円形の空飛ぶ円盤とでもしておきましょう。こういう細かな設定は気にしたら負けです。それに月の都の人なんて、言い方を変えれば宇宙人なんですから、こんな感じで良いと思います。うん。

その円盤の中にいた宇宙人……いえ、月の都の王と思われる人が家に向かつて

「造磨よ、出て来い！」

と、威厳たつぱりの声で言いました。初めて会つたはずなのに、作者さえ忘れかけていたお爺さんの本名を知つているなんて驚きですね。

これを聞いて、お爺さんはふらふらと外へ行き、王らしき人の前でひれ伏してしまいました。今まで威勢は微塵も感じられません。

「この様子を見て、王らしき……しつこいので王にしましょう。王が言つ事には、

「汝は、心が幼くてちつぽけでどうじょうもないな。昔は細々と、地道にお金を稼ぎ正しい生活を送っていたから、少しでもお前の助けになればと、少しの間姫を預けた。お前は、見違えるような金持

ちになり、十分に良い生活を送つておる。それなのにまだ、姫を手元に置き、富を築こうとはなんたることだ！姫はこちらの都で罪を犯した罪人、その罪を贖つ期間が過ぎたので迎えに来たのだ！それを引きとめようとは、叶わぬこと。早く姫をお出しせよ……」

確かに、今のお爺さんは富を築き裕福な生活を送つています。

王が言つようになつたまま「まだ富を築くのじやーー」なんていう願望は、このお爺さんの事ですから全く無いとは言えないでしよう。しかし、かぐや姫を帰したくないというのはそれだけが理由ではないはずです。誰が好き好んで実の子と回じよつに育てた娘を手放しましょうか？

お爺さんが、答えて言つことには、

「かぐや姫から恩恵を受け……いや、養うこと一十年になります。ただの一度も儂のかぐや姫で富を築こうなんて考えたことございません。それに、今『少しの間』とおっしゃいましたよね。私たちにとってかぐや姫との時間は長い時間です。きっと別のところに居るかぐや姫のことでしょう。此処にいるかぐや姫は閉じ込……じやなくて、病氣、そう病氣、しかも重病で寝ております。だから行けないでしよう。」

所々に本音やら、苦しい嘘やら　もつゝこままでへると田舎町を言つてゐるのがバレバレです。

こんなダメダメなお爺さんの言い訳なんか、さうと聞き流し、空飛ぶ円盤を寄せ、月の都の王は、お爺さんとは正反対の威厳たっぷりな声で、じつと言つてました。

「さあひ、姫よーこんな薄汚れ、欲にまみれた人間界にむづ居る必要はありませんー出てらっしゃー！」

すると、錠を下ろし、かぐや姫を閉じ込めていた筈の部屋の戸がぱつと開いてしまいました。

下ろしてあつた格子なども、人が手を触れてないのに開いてしまいます。

さすが、宇宙人。やることが違います。

お婆さんが抱きかかえていた、かぐや姫も外へ出て行つてしましました。

お婆さんは、空を見上げただ大粒の涙を流すばかりでした。

さて、月の都の王は「欲にまみれた」なんて言つてますが、皆が皆お爺さんみたく強欲だつて田で見られるのも、正直迷惑極まりないんですけどねー。

お爺さんが、大粒の涙を流し泣き伏せつて「ひい、かぐや姫は駆け寄りました。

「じ……お爺様、泣かないで下さいまし。私だつて別に行きたくないのに行くんだし……です。せめて見送るくらい見送つて欲しいのです。」

『ー！？』

上の括弧は皆の驚きを表しています。

なんせ、あのかぐや姫が敬語を使ったのですから、そりゃあもう驚きますとも。

きっと普段見たく「じじい、ばばあ」とか、「だしー」なんていう言葉遣いをしていると、月の都の人には「こいつ、全然反省して無い！もとは罪人なのに！」とか思われるのが嫌だつたんでしょう。けれども、上手く敬語が使ってません。馴れない事をすると、普段の癖がぽろつと出てしまうのです。皆さんも面接などの時は気をつけましょう。

皆は驚いていても、お爺さんはそんなこと気にしちゃいません。我が子が天に行つてしまつのですからそれどころでは無いのです。かぐや姫を引きとめようと必死です。

「どうして儂を置いて行つてしまつのじや。儂はもつとかぐや姫の傍に居たい！もつと家を繁栄させて、もつとお前に色々なことをしてやりたい！そんな高貴な人たちならば仲間入りしたいから一緒に連れて行つてくれはしないか！」

もう「お爺さん=俗世の穢れ」みたいな方程式が見えます。我が子が大事なのか、それとも富が大事なのか。天秤にかけたら富のほうが重いような気がします。月の都の人たちも、お爺さんの「こうこう」ところが嫌なのでしょう。

「じゃあー、手紙を書き残しましょう。私の事がー、恋しくなつたら読むよーにーーなのです。」

「金ーー姫ーー」と泣き喚くお爺さんに、かぐや姫はしどりむぢりの敬語でせう伝えると、筆を執りました。

『私がー、月の生まれじゃなかつたら悲しませることもなかつたんだろうけどねー、『じめん…。』（ノヽ）。』いつまでも一緒に居たいけど、どう考へても無理つぱいしー（、-、-、-）△私も帰りたくは無いんだけー。：（；、、、-）。：。じゃあさ、この手紙と着物を置いてくからーそれで時々私のこと思い出してくれんない？ -（、・・・）私も悲しくて、月に帰つても月から落ちそうな気分だしー（、A、。）じゃあね、今まで本当に有難う、マジ感謝ー￥（^ - ^ 。）』

……本当に悲しいんだか何だか分からぬほど、顔文字がふんだんに使つてある手紙です。

しかも、手紙には敬語の欠片も見えません。こんな文章を月の王が見たらきっと「やっぱ反省してねーんじやねえか。」なんて思つことでしょ？。

こんな手紙でも、お爺さん達にとつては、かぐや姫から貰つ最初で最後の手紙です。喜んでいいのや、悲しめばよいのや、考えれば考えるほど涙が止まることはありません。

王以外の宇宙人と書く名の天人の中に、何やらに箱を持っている

人がいます。

一つの箱には天の羽衣、もう一つの箱には壺に入った不老不死の薬が入っています。

「壺の薬をお舐め下さい。こんな穢れた者達と一緒に穢れた世界で穢れた食事を摂っていたのですから、さぞかし気分がお悪いでしょう。穢れてるから。」

天人の一人がいやに「穢れ」を強調してそう言いました。聞いている方はイラつとします。

かぐや姫は、それを一口舐めると、残りを脱いだ着物に包もうとしました。きっと形見の品にとでも思つたんでしょう。けれど天人が包ませませんでした。それも当然です。不死の薬なんてやたらに出回っては大変な事になりますからねません。

もう一人の天人が、かぐや姫に天の羽衣を取り出し着せようしました。すると…

「待つて」

とかぐや姫が言つので、天人の動きはピタリと止まりました。

「その衣を着ると一、地上の人とは違う風になっちゃうし……なるそうです、はい。その前に一言言つておきたいことが。」

と言つと、かぐや姫はまたもや筆を執りました。

迎えに来た宇宙人ご一行はどこか苛々しているようです。

またもや、せらわらと手紙を書き始めたかぐや姫を見て、天人は「遅い！」

と言いました。内心「いつまで待たせるんだよ、待ってる方の身にもなれよ。」なんて思つてゐるようですが、元々神経の凶太いかぐや姫はそんなことお構いなしです。

「五月蠅い人たちー、マジウザイー…つ、つとおしいー。本当に人の気持ちの分からない人たちで、じぞこますわ、ほほほほほ。」

と、言いながら手紙を書き続けます。

地が出ているのを必死に誤魔化しているようですが、天人たちは地が出ていることすら気付いていません。やっぱり鈍い人たちの集まりなんでしょうか？

さて、かぐや姫は先程お爺さんに手紙を書いていました。ってことは一体今書いている手紙は誰宛なんでしょうか？

その答えは意外や意外、文通相手のあの人でした。

『こんなに沢山の兵動かして、私を引き止めようなんてー、お前にしてはいいことやるじゃん。まあ、それも甲斐なく私は強制連行されちゃうんだけどねー。うん、笑えないよね。あはははは。私が今まで帝に仕えなかつたのはこういう面倒な身だからだつたんだよねー。じゃあね、確かにアンタは変態だつたけど、私、嫌いじや無かつたよ。私のこと悪く思わないでね?』

「兵を動かした」「変態」この言葉から連想できるのは、そう帝様

です。

らしくもなく、乙女チックな文章を書いて、更に歌を添えました。

『今はとて天の羽衣着るをりぞ君をあはれと思ひいでける（訳* 私馬鹿だね、アンタ以上に。天の羽衣を着て記憶が無くなるこの瞬間に、アンタの事好きだつて気付くなんて。）』

どうやら帝の歪んだ恋は叶つていたようです。

しかし、かぐや姫の記憶はもうすぐになくなつてしまします。もつと早くに結ばれてしまつていたらもつと苦しい思いをしていたかもしれません。

でも、苦しい、思いとか、痛そうなもの、帝つて好きそうですね？ 何はともあれ、かぐや姫は手紙と歌に不死の薬を添えて、はい！ お値段1万5千円！ 送料はジャパ（以下略）……ではなくて、頭の中将がたまたま近くに居たので、その人に帝に渡すように託しました。あれだけ「不死の薬渡しちや駄目ー！」なんて態度に示していた天人があつさりオーケーしたのが不思議ではありますが、その辺は触れてはいけないようです。

頭の中将が品を受け取ったのを確認すると、天人たちはかぐや姫にすぐ天の羽衣を着せてしました。

さつきまで、お爺さんと離れたくないと思っていた感情も完璧に消え失せ、かぐや姫は他の天人と同様、心がなくなつてしましました。そして、さつさと空飛ぶ円盤に乗り込み、月へと帰つてしましました。

あつせりですねえ。

おやつは300円分！（続）

その後、お爺さんとお婆さんは、血の涙を流して悲しみました。大事な娘が去つてしまい、おまけに財産は減る一方、これじゃ泣きたくもありますが、泣いてどうにかなる事じゃないのですから、仕方ありません。

かぐや姫の書き残した手紙を、お付の者が何度も読み聞かせるのですが、

「もう命など惜しくは無い。富も名誉も今となつては何の意味も無い。あの親不孝者のいや、大切なかぐや姫よ…そなたが居ないのに、惜しむものなどあるだらうか。もう、何も意味がないのじや。」

そう言つて一人とも起き上がりつともせず、薬も飲まずに病の床にふせつてこます。

あんなに威勢が良くて、金のことを四六時中考えていたお爺さんとお婆さんも、こうなつてしまつと可哀想です。この世にはお金には換えられないものがあるという大切な教訓になる光景ですね。

中将鷹野のおおくには、「俺達意味無いじゃん」とかぼやきながら、兵を引き連れ帰つて行きました。

その後、帝に出来事を事細かに報告しました。

「だーかーらー、引き止めようとしたんですが、この世のものではない人たちに全く攻撃が通用しなくて、かぐや姫は強制連行されちゃったんです。」

「へ、嘘でおじや一麿は認めないでおじやよ。」

確かに、中将は「攻撃したけど通用しなかった」と言い張つていますが、実際は手も足も出ず、その場に倒れ込んでいただけでした。

「ああ、やうやう。かぐや姫から手紙と怪しい薬を預かりました。何でも不老不死の薬だそつで。」

「寄越すおじや。」

乱暴に中将から品物を受け取り、早速帝は手紙を読み始めました。

「う、これは……」

帝はその手紙に大きく心を動かされ、その田から何も食べず、音楽を奏でたりという事もやめ、お爺さんとお婆さんのように無氣力になつてしましました。

そりやそうです。もう一度と余念なくつてかひ、両思いだと分かるなんてそんな悲しいことがあるでしょうか。

何日か経つたある日、帝は大臣などの位の高い家臣たちを呼び集めました。

「ううから一番近くて日本で一番高い山はあるでおじやか？」

「一番近くて一番日本で高い山なんて無理な」とおっしゃらないで下さこよ。一番近くでないとひで良このなう駿河にある山が、何でも日本一高いらしこですよ。」

帝はこれを聞いて「そうか、天に一番近いのでおじやな。」と一人納得したように頷き、歌を詠みました。

『逢ふ』とも涙に浮かぶわが身には死なぬ薬もなにかはせむ（訳）
＊もう一度とあの痛みを味わえないと思うと涙がとまらないでおじや。麿の事を叱ってくれるそなたが欲しかったのに、不死の薬なんて麿にとつては価値の無い物でおじや。』

その歌と、かぐや姫がくれた手紙、不死の薬を使者の調のいわさかと言つ人に渡しました。

「これを持つて駿河の山へ行くおじや。ちよ、ちよつと待つおじや。人の話は最後まで聞いてから行くおじやよ！」そつ、其処にもう一度座るおじや。おほん、これをその山の頂上で燃やしてきてほしいおじやよ。」

「えー、面倒ですよ。なんでそんな物の為に頂上まで？麓じや駄目なんですか？」

「麓じや意味がないおじや！それと大切な物のなんだから、そんな物とか言つでないおじや！」

調のいわさかは、「そんな大切な物なら燃やすなよ。てか、自分で行きやがれ。」と内心文句を言いつつ、それらを持って、共を引き連れ、駿河の山に向かいました。

おやつは300円分……持つて行つたか定かではありませんが、調のいわさかは帝に言われたとおり、その山の頂上で不死の薬とくぐや姫からの手紙を燃やしました。

そんなわけで「富士の山」は「不死の山」から来ているそうです。

その煙は未だに雲の中に立ち昇っているそいつですよ。
めでたし、めでたし…… なのか？

おやつは300円分！（壳）（後書き）

いかがでしたでしょうか？竹取物語をギャグ小説にして見ましたけれど、原作のイメージを大きく傷つけてしまったことにはお詫び申し上げます。

では、感想待っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7938d/>

偽・竹取物語

2010年10月11日21時39分発行